立教大学ボランティアセンター
2020 年度活動報告書

2021 年 3 月

立教大学ボランティアセンター

はじめに

コロナ禍でのボランティア活動を模索して

ボランティアセンター長　平野　方紹

2020 年の流行語大賞に輝いたのは、コロナ感染のリスクとされる「三密」（密閉・密集・密接）でした。また同年を表す漢字にも「密」が選ばれ、コロナ感染に人々がどれだけ振り回されているのか、改めて突きつけられました。

この「三密」対策は、人と人との接触（人流）を遮断・減少させることが基本ですので、人とのつながりや距離が従来通りにはいかないということとなりました。

こうして、感染予防のため 2020 年 2 月からキャンパスに人影はほとんど見られなくなり、卒業式、入学式、新入生歓迎イベントといった恒例行事もすべて中止になり、約 1 ヶ月遅れで始まった新年度の授業もほとんどがオンラインで、パソコンの画面越しで接するしかない状況が続きました。

こうした中、ボランティアセンターの活動も大きく影響を受け、「清里環境ボランティアキャンプ」や「農業体験 in 山形県高畠町」などのセンターの主要事業は中止となり、学生たちのボランティア活動支援も感染防止のため停止せざるをえない状況に追い込まれました。

市中に目を転じると、コロナで雇用不安や経済不安が一層深刻化し、支援を必要とする人々は増大し、特に子どもたちは家庭内に「閉じこもり」となり、心身に大きな影響が生じていることが各方面から指摘されています。

本来であれば、こうした事態に人々が手を取り合って支援する、まさにボランティアが、その真骨頂を発揮して活躍すべきところですが、「感染予防」のために、手を差し出すことができず、それを見ているしかない、という現実が突きつけられました。ボランティアセンターとしても、単に予定していた事業を実施できないだけでなく、社会的に必要とされながら、それに応えることができないというジレンマを抱え続けた日々でした。

これは学生たちも同じです。子どもたちやお年寄り、地域の皆さんの笑顔を「活動の糧」としてきた多くの学生たちにとって、いきなりつながりを「遮断」され、「部外者」にされてしまったことによる戸惑いは決して小さなものではありません。

コロナ感染が人々の健康や暮らしに暗い影を落としていることはいくら強調してもしきれません。そして、人々の心にも深刻なダメージを与えています。

感染者やその家族への誹謗中傷、医療従事者への偏見や攻撃など、本来病気をいたわったり、その努力に感謝すべきなのに真逆の行動が後を絶ちません。

この根底には、「感染させる他者」と「感染させられる自分」という対立構造が、人と人との関係にはびこってしまったと言えます。誰もが自分を守ることに汲々とし、この対立構図に飲み込まれ、絆や連帯といった人と人とのつながりが吹き飛ばされてしまいました。このトゲトゲしさが社会を覆っていることに事態の闇の深さがあります。

コロナ禍での「三密」対策は自分を守るためでもありますが、社会全体で感染を収束させようという「社会連帯」の取り組みでもあります。しかし、自己防衛に強迫され、みんなでコロナ禍を乗り越えようという意識は残念ながら希薄になっているではないでしょうか。

周りの人とつながっていることに思いをはせる、他者を思いやる想像力を働かせる、そんな「人を思いやる心」が、いまの殺伐とした社会に求められています。

これまでほとんど口にのぼらない言葉でありながら、この感染下で、頻繁に使われるものに「対面」があります。これまでの生活や大学での当たり前の日々はこの「対面」であったようです。

この対面は、「face to face」の訳語とされています。直に顔を会わせ、直接言葉を交わす、そんな形態的意味と、「心を通わせる」という含意もあると言います。対面での活動がなくなってしまったことで、心が通じにくくなったとすれば、今後ワクチン接種や治療法開発で感染禍を乗り越えたとしても、人々の心に荒涼とした枯れ野だけが広がっていたのでは明るい未来を築くことは難しいでしょう。

こうした困難な時期だからこそ、「人を思いやる心」を育み、広げることが大きな意味を持っています。

2020 年度のボランティアセンターの活動は大きな制約を受けましたが、スタッフ一同、この灯を絶やしてはいけない、できるかぎりのことをしようという想いで活動してきました。

オンラインでのボラカフェやサミットの開催、ボランティアセンターメールマガジンの改善、バリアフリー上映会のオンライン化など新たな取り組みも行いました。五里霧中の中、みんな手探りではありましたが、黙って下を向いてうずくまるのではなく、できることを摸索してきた日々でした。

その意味では、ボランティアセンターの存在意義が問われた 1 年でもありました。

まだ、その確固とした答えは出ていませんが、次につなぐ何かが、手応えが見えてきたと思います。混迷と混乱の 2020 年度でした。この 1 年を、無駄で無意味とせず、これからの活動の糧とできるよう、ボランティアセンターに関わる多くの方々のご指導ご鞭撻をお願いする次第です。

目次

はじめに ………………………………… ボランティアセンター長　平野方紹
Ⅰ．利用状況 ………………………………… 1
Ⅱ．2020 年度の支援 ………………………………… 3
Ⅲ．授業 ………………………………… 5
Ⅳ．ポール・ラッシュ博士記念奨学金 ………………………………… 7
Ⅴ．開催プログラム報告 ………………………………… 9
Ⅵ．その他 ………………………………… 31
Ⅶ．ボランティアセンター研修会 ………………………………… 33
Ⅷ．ボランティアセンターの概要 ………………………………… 52
Ⅸ．ボランティアセンター運営協議会委員一覧（2020 年度） ………………………………… 54

Ⅰ．利用状況（2019 年度※）

※2020 年度は未集計。参考数値として掲載。

1. 団体登録・ボランティア募集件数 （（　）内は、前年度同時期の数）

（1）登録団体数

登録団体総数	191 （179）
新規登録	46 （ 38）
既存登録	145 （141）

（2）登録団体によるボランティア募集件数

ボランティア募集件数	153（173）

ボランティア募集の他に、ポスター掲示、チラシ配布依頼多数

（3）領域別ボランティア募集件数

領域	総数
福祉	43（ 43）
教育	38（ 27）
環境	22（ 26）
国際	17（ 24）
文化・スポーツ	13（ 18）
地域・災害	10（ 22）
その他　　※	10（ 13）
合計	153（173）

☆「ボランティア情報シート」に記載したもののみの件数。募集のチラシ等の配架のみの依頼は含まれていない（子どもキャンプ、学習支援、国際協力など多数の依頼がある）。
※子どもへの企業体験プロジェクトのサポートボランティア、犯罪被害者支援ボランティアなどが含まれている。

しょうがい者支援や高齢者支援などに関する福祉系ボランティアへの募集件数は昨年同様、第1位となっている。学習支援などの教育系ボランティアも、社会的需要が高く募集件数が大幅に増えている。
他領域に関しては募集件数に偏りがなく、おおむねバランスよく学生に紹介できる環境が整っている。

2. 登録団体からのご意見

（2019 年12 月実施、団体向けアンケートより抜粋、189 団体中 65 団体より回答）

ボランティア参加学生に対する評価	**＜良かった点＞**何度もボランティアに来てくれているので、児童・生徒との関係も築けており、大変助かった。/企画の概要を的確に把握して、活動をしてくれた。/若者らしく、子どもたちに近い目線で親密に学習支援に向き合ってくれた。/子どものやる気を引き出す工夫が見られてよかった。/勉強熱心な学生が多く、ミーティングの際も積極的に質問をしてくれた。 **＜改善すべき点＞**申し込み後、連絡が取れなくなる学生がいた。/割と早い段階で全てを理解したつもりになって判断が浅くなってしまう傾向にあった。/授業の課題でレポートを書く場合は予め相談してほしかった。/参加期間が短期であった。/直前になって「来られない」などの連絡があって困った。
ボランティアセンターに対する要望	学校にて団体やボランティア活動の紹介ができる機会があると非常にありがたい。/もう少し多くの学生に参加してほしい。

引き続き登録団体とコミュニケーションを密に取りながら、丁寧に対応していく必要がある。また、「ボラカフェ」につながるような学生の紹介をお願いしていきたい。
授業の単位や課題等でボランティアをする学生も増えてきているが、活動には責任が伴うことや、基本的なルールの順守を徹底することの大切さを事前にしっかり伝える必要がある。
また、学生の継続的な活動につながるよう、一人ひとりの学生にあったボランティア活動の紹介が重要である。

3. センター利用　【(　)内は、前年度同時期の数】

(1)センター来所者

来所者数	3,518 (5,341)
池袋	2,256 (3,550)
新座	1,262 (1,791)

情報収集、相談・面談・打ち合わせ等でセンターを利用する学生の総数。なお、陸前高田サテライト利用者等も含まれている。減少理由は(5)のコメントを参照のこと。

(2)相談票記入者

利用登録者数	658 (834)
男	152 (180)
女	506 (654)

ボランティアセンター来所者の内、相談票を記入した人数。昨年度より、相談票記入者数は減少しているが、頻繁に足を運ぶ学生が多く見られた。また、ボラカフェやオリエンテーション、ボランティア講座に参加した学生の情報も登録している。

(3)メールマガジン・SNS 登録者

メールマガジン登録者数	3,452 (3,161)
新規登録	291 (　409)
Twitter　フォロワー数	2,404 (1,998)
Instagram フォロワー数	133

メールマガジンは、原則月2回定期的に発行している。コーディネーターのコラムやボラカフェの様子、最新のボランティア情報などを載せている。
また、より多くの情報を届けるために、今年度より学生がよく利用する SNS の Twitter に加え Instagram でもイベントの情報などを頻繁に発信している。

(4)センター利用動機ランキング(複数)

1	情報収集	275 (196)
2	相談(個人・国内)	251 (311)
3	ボランティア情報複写希望	188 (125)
4	相談(個人・海外)	76 (　42)

センター利用動機の1位は、「情報収集」であり、幅広い分野のボランティア情報を探しにくる学生が多く見られた。また、学内の掲示板やボラナビを見たり、授業で紹介されたボランティアについて尋ねる学生も多い。

(5)学部別相談票記入状況　(小数点第一位を四捨五入)

	学部	件数	単純増減数	全体比(%)
新座	コミュニティ福祉学部	160 (215)	-55	24 (　26)
池袋	文学部	147 (166)	-19	22 (　20)
池袋	社会学部	77 (　81)	-4	12 (　10)
新座	観光学部	65 (112)	-47	10 (　13)
池袋	法学部	52 (　75)	-23	8 (　9)
池袋	経済学部	51 (　32)	19	8 (　4)
新座	現代心理学部	45 (　66)	-21	7 (　8)
池袋	経営学部	19 (　14)	5	3 (　2)
池袋	理学部	17 (　26)	-9	3 (　3)
池袋	異文化コミュニケーション学部	16 (　30)	-14	2 (　4)
	その他(大学院・研究生)	9 (　17)	-8	1 (　2)
	総計	658 (834)	-176	-

相談票記入者を学部別に集計した結果である。2018 年度同様、コミュニティ福祉学部、文学部の学生が多く相談に来ている。
人数が減少した理由として、教職課程の学生の来室減少やコミュニティ福祉学部の授業との関わりが減ったことが考えられる。2019 年度は、広報により重点を置き、その成果は徐々に出てきている。

(6)参加希望が多かったボランティア団体ランキング

	団体	分野	情報提供数
1	特定非営利活動法人　NICE	国際	42
2	一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワーク	教育	38
3	豊島区立中高生センタージャンプ東池袋・長崎	教育	33
4	特定非営利活動法人　グッド	国際	32
5	一般社団法人　国際教育交換協議会　(CIEE)	国際	27

Ⅱ. 2020 年度の支援

コロナ禍における支援

内容	新型コロナウイルス感染拡大の影響により、昨年度の2月以降、開催プログラムが軒並み中止となり、その状況は 2020 年度に入って緊急事態宣言の発出を受け、さらに続くこととなった。本学のすべての授業の開始延期やオンライン化が進む中、本学では課外活動にあたるボランティア活動についても、そのガイドラインに従い、ボランティア紹介の停止をはじめ、様々な影響を受けることとなった。 コロナ禍という非常事態において、当センターでは、臨機応変に常に「今できること」を考え、次のように支援を行ってきた。 1. 広報の活性化 例年、4月のボランティアオリエンテーションに参加した新入生が、その後の当センターの企画に多く参加するという傾向があったが、今年度はそのような機会が失われたこともあり、少しでも学生がボランティア活動に関心を持つきっかけとなるよう、SNS(Instagram、Twitter)やメールマガジンの発信に力を入れ、学生とボランティアセンターがつながりを持つことを目指し、様々な方向から働きかけた。 多い時には、SNS を週に2～3回、メールマガジンを週1回程度発信した。これまでは、主にボランティアやイベントを紹介する内容が多かったメールマガジンも、今年度は、オンラインでのイベントの告知・報告、そして、一番身近である本学のボランティア経験者(在学生・卒業生)のエッセイを紹介していくことで、この先活動ができるようになった際に、一歩を踏み出すことができるきっかけとなるよう、発信し続けた。 また、これまでの SNS やメールマガジンでは、特定のサークルの紹介は行っていなかったが、「Online Welcome Week」の昼休みの時間だけでは、その魅力を伝えきれないという今年度の反省点を鑑み、関係するボランティアサークルに呼びかけ、順番にその情報を掲載し、各サークルの SNS で最新情報が見られること等もあわせて周知した。 2. オンラインの活用 ①Online Welcome Week、オンラインボランティア・カフェ等の開催 (プログラムの開催情報については、本報告書 P.9以降を参照。) 「ボランティアを通じて自分自身が成長した、考え方が変わったこと」などをテーマに、語り手である学生にとっては自分の言葉で語りやすいこと、そして、聞き手である学生には参加したことで温かいつながりを感じられるように、内容や雰囲気作りを心掛け開催した。また、録画したプログラム等を参考に、毎回スタッフ間でフィードバックを行い、改良を重ねた。 新型コロナウイルス感染拡大の影響により、中止になったものも多くあったが、これまでとは違う形で、今年度開催したオンラインイベントもまた、学生同士や学生とボランティアセンターをつなぐ有効なツールとなった。オンラインプログラムの開催を通じて、学生同士も、お互いに新しい発見があったようである。コロナ終息後も、状況に応じて柔軟な形でオンラインを支援に活かしていきたい。 ②ボランティア相談、サークル面談等の支援 学内の課外活動に対する規制緩和に伴い、秋学期より、これまでメールやオンラインのみで受けていた個人の学生の相談を、事前予約制で対面でも可能とした。また、ボランティアサークル支援の面談は、6月から随時希望に応じて行った。(詳細は、本報告書 P.17 を参照。) 3. 他部署との連携 学生の興味・関心の幅を広げるための様々な情報を届けるため、部署間で以下のような協力を行った。また、当センターのホームページの改修や大学のコロナ関連のホー

	ムページへの情報提供も行い、学生がわかりやすく利用できるよう工夫を重ねた。 ①SNS、プログラムの相互協力 ・学内他部署の SNS アカウントの相互リツイート ・キャリアセンターのオンラインガイダンス用資料に、当センターの情報を掲載（2回） ・学生相談所の企画に、当センターのコーディネーターが参加し、センターの概要やイベントを紹介 ②コロナ禍におけるボランティア活動について 　学生部の『課外活動ガイドライン』の遵守を条件に、8月1日（土）より課外活動が段階的に認められることとなった。本学のボランティア活動もこの基準に従うことから、夏季休業に入る前の7月下旬に、ボランティアセンターの支援対象となる 19 サークルの代表・副代表宛に、メールで夏季休業中の活動に関する連絡を行った。 　注意喚起、感染対策への留意事項に加え、万が一の場合の追跡等のリスク管理も考え、活動を行う場合の事前・事後報告、参加者名簿等を定型様式で取りまとめ報告するようにした。また、公認団体／未公認団体の管轄の関係で申請先が変わるため、学生部と密接な情報共有を行った。 　秋学期以降も、新型コロナウイルス感染拡大を踏まえ、緊急事態宣言発出中のボランティア活動については、極力対面でのボランティア活動を控え、「他者を思いやり、活動を中止・延期することも大切である」ということを繰り返し発信している。

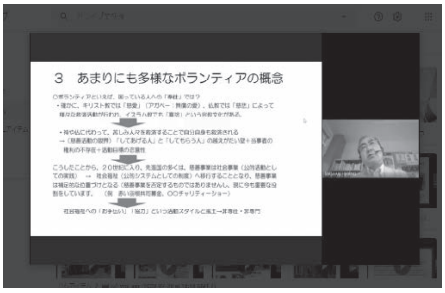
Ⅲ. 授業

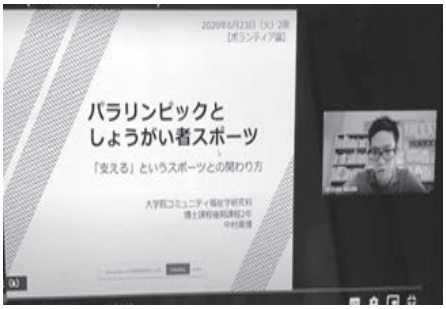
1. 授業

主管授業「ボランティア論−知ること、考えること、行動すること−」

授業名	全学共通科目　コラボレーション科目 ボランティア論ー新しい価値の創造・共有・啓発		
曜日・時限	春学期　火曜日 2 限：10:45～12:25　　2020. 5.5(火)～ 7.21(火)		
方法	Google Meet を利用したオンライン授業		
担当者	平野　方紹(コーディネーター、ボランティアセンター長、コミュニティ福祉学部教授) 豊永　はるか(兼任講師)、ゲストスピーカー		
履修者数	200 名		
内容	＜授業のねらい＞ (1)漠然としたボランティアのイメージを、ステレオタイプなボランティアだけでなく、スポーツボランティア、企業の CSR 活動など、ボランティア活動が多岐に亘っているということを実感することで、ボランティアの「多様性」について理解する。 (2)ボランティアを考えることを通して、自分と社会との接点を意識できるようになる。 (3)社会問題を自分の頭で考えられるようになり、その解決や新たな社会の枠組みを形成していく場へ積極的に参画するきっかけになる。 (4)具体的なボランティアのイメージを理解することで、実際の行動へとつなげられるようになる。 (5)ボランティアの経験を、自分の言葉で発信できるようになる。 (6)ボランティアの経験から、自分のキャリア形成を考えることができるようになる。 ＜授業内容＞ 　2020 東京オリンピック・パラリンピックでボランティアが注目されている。この大会では 11 万人を超えるボランティアの活躍が期待され、今までに類を見ない大規模な組織で運営される予定であった。 　しかしながら、競技はもちろんのこと、開催時期やイベントもあえてオリンピックとパラリンピックを分けて考えている。これを一過性のものとせず、発展させるためには多くの市民が共感・共鳴する「共に生きる社会」を目指す新しい価値や活動が必要になってくる。それに伴い活動への誇り(ロイヤリティ)は高まり、同じ志を持つ仲間も増え、創造と革新の連鎖を構築させることが可能となる。 　ボランティアについて、ボランティアを提供する側だけでなく、サポートを受ける側の気持ちも汲み取りながら、日常的な活動だけでなく、災害や海外での支援、企業の社会貢献活動等の様々な切り口から、現場で活躍されている方々のメッセージも交えて多面的に検討し、社会に潜む諸問題に対して自分自身の視点から能動的にとらえられる学生へと成長できるようにする。日頃から目にする活動のみならず、災害や海外での支援、オリンピック・パラリンピックを代表とするビッグイベントでの活動をも交え、そこに関わりのある方々をゲストスピーカーとして招聘することで、生きた声を学生に届け、社会に潜む諸問題に対し、より自分事への落とし込みを図り、学生の成長を促す。		
	氏名	現職	専門分野(テーマ等)
担当講師	【コーディネーター】 平野　方紹	ボランティアセンター長、 立教大学コミュニティ福祉学部教授	社会福祉原論(現代社会と福祉)、公的扶助論
	【兼任講師】 豊永　はるか	日本財団 学生ボランティアセンター	ワークキャンプ、国際交流、災害ボランティア等
	磯田　浩二	NPO 法人グッド　代表	ワークキャンプ、ユースワーク
	森田　泰進	読売新聞　記者	ボランティア体験を言葉にする
	中村　真博	立教大学コミュニティ福祉学研究科博士後期課程	パラリンピックとしょうがいスポーツ

	大倉　智	株式会社ドーム取締役 執行役員 CSMO	企業の社会的な取り組み
	宮川　豊史	東久留米市議会議員	支えること、支えられること
	井上　綾乃	一般社団法人ピースボート 災害支援センター	災害ボランティアにおいて学生にできること
	薮本　雅子	フリーアナウンサー （元日本テレビアナウンサー）	ソーシャルな観点から仕事をする―ハンセン病報道
	福井　崇人	京都造形芸術大学客員教授 一般社団法人 2025PROJECT 代表理事	ソーシャルデザイン
授業内容 （全 12 回）	1.(5.5)　オリエンテーション 立教大学のボランティアプログラム紹介（学内ボランティア活動） 2.(5.12)　一歩踏み出す。世界、広がる―ボランティアに向けてのワークキャンプの視点 3.(5.19)　災害ボランティアについて①学生にできることは？ 4.(5.26)　災害ボランティアについて②大学の取り組みと参加者の声 5.(6.2)　ボランティア体験を言葉にする 6.(6.9)　スポーツの持つ力―立教のスポーツ交流プログラム 7.(6.16)　地域と社会が連動した取り組み 8.(6.23)　パラリンピックとしょうがいスポーツ 9.(6.30)　支えることと支えられること 10.(7. 7)　ソーシャルな立場から仕事をする―ハンセン病報道への想い 11.(7.14) ソーシャルデザイン―アイデアが世界を変える―（授業の総まとめと振り返り） 12.(7.21) ボランティアの歴史と諸概念, ボランティアを取り巻く社会		
まとめ	今年は新型コロナウイルス感染拡大のため、Google Meet を利用したオンラインでの開講となった。従来よりも履修者も少なかったが、定員 200 名のなか、出席率も毎回 90%近く、リアクションペーパーの提出も例年よりも多かった。 ゲストスピーカーとして様々なボランティアの現場で活躍されている方にお話いただき、現場の持つ課題や、活動の魅力などを伝え、ボランティアをすることを想像できるよう工夫を凝らした。 今年度は本来であればオリンピックイヤーであったので、スポーツを通じたボランティアなど、多岐に渡るボランティアの形を色々な角度から紹介し、多様な関わり方の可能性を学生に提示した。また卒業生や現役の大学院生に登壇発表してもらうことで、ボランティアをより身近に感じてもらい、具体的なイメージを理解し、実際の行動へとつながるきっかけを提供した。 オンラインでの授業は、Google フォームを利用することにより、リアクションペーパーを回収する手間などは大幅に削減されたが、締め切り後に提出する学生や、提出方法を間違えてしまうケースが見受けられた。今回学生にとっても初めてのケースで混乱もあったかと思われるが、事前に提出方法や受講上の留意点は学生に丁寧に説明する必要がある。		





授業の様子

Ⅳ. ポール･ラッシュ博士記念奨学金

(1)概要

ポール・ラッシュ博士記念奨学金は、キリスト教の精神にもとづいて、地域、教会、病院などへの奉仕活動を生涯にわたって実践された、元本学名誉教授ポール・ラッシュ博士を記念して設けられました。この奨学金は、キープ協会在米後援会(キープ協会は、地域活動、キリスト教学生活動などの拠点として同博士が設立された機関です)、およびその他の有志によって寄贈された基金とその収益金をもとに支給されるものです。

この奨学金の目的は、ポール・ラッシュ博士の精神や生涯にわたる諸活動を記念し、本学学生の奉仕の精神に基づく諸活動を奨励し、援助することです。

対象・条件等は、次の通りとなります。

1. 本奨学金は奉仕の精神に基づく活動を行う本学学生(個人または団体)を対象とする。「奉仕の精神に基づく活動」とは教育、福祉、環境保護、開発、国際交流、災害復興支援等、様々な領域における社会貢献を目的としたボランティア活動等を指し、活動の現場は国内外を問わない。
2. 営利的活動、学術研究やそのための調査などを目的とした活動は対象としない。
3. 本奨学金の主旨にかんがみ、申請者はポール・ラッシュ博士の生涯やキリスト教における奉仕の精神について学ぼうとする姿勢が求められる。
4. 本奨学金採用者は、後日、キープ協会を訪問し、ポール・ラッシュ博士の精神や活動について学習する。
5. 申請者(代表者)は当該年度の健康診断を受診していなければならない。

奨学金額は、年額合計 70 万円以内(給与奨学金)となります。

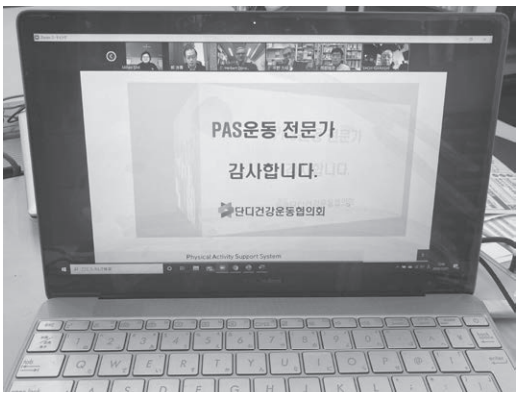
(2)2020 年度募集説明会

開催日時	2020. 10.12(月)12:30～13:00
開催場所	オンライン開催　Zoom 使用
内容	(1)ポール・ラッシュ博士の人物像と立教大学におけるボランティア活動支援 総長室社会連携教育課課長　佐藤一宏 (2)奨学金募集についての説明 総長室社会連携教育課課長　佐藤一宏 (3)質疑応答
参加者数	6名(本学学生4名、職員2名)
今後に向けて	例年5月に開催していたが、2020 年度は、秋学期に延期され、また、オンラインでの開催となった。また、例年募集説明会と併せて、前年度の受給者を招いて、活動報告会も開催していたが、活動報告会は中止となった。 参加者からは、今年度は課外活動が制限されることから、次年度の応募を検討しているという申し出もあった。

(3)ポール・ラッシュ博士記念奨学金

募集期間	2020.10.13(火)～ 10.23(金)15:30
選考委員	平野　方紹(選考委員長、ボランティアセンター長)、五十嵐　正司(チャプレン長)、 澤田　直(文学部)、岡部　桂史(経済学部)、ドノヴァン・ハーバード・A(経営学部)
選考日	2020.11. 10(火)18:50～19:30　オンライン開催　Zoom 使用
受給者	シム　ミヒ(21 世紀社会デザイン研究科博士後期課程6年次)　36 万円 「PAS(Physical Activity Support)プログラムにて健康長寿社会を目指す」
授与式	2020.12.1(火)12:30～13:00 場所:オンライン開催　Zoom 使用 出席:淺田　豊久(公益財団法人キープ協会理事長)、 桑田　秋光(公益財団法人キープ協会副理事長)、

	郭　洋春（総長）、 平野　方紹（選考委員長、ボランティアセンター長）、 五十嵐　正司（チャプレン長）、 岡部　桂史（経済学部）、 ドノヴァン・ハーバート・A（経営学部、総長室調査役）、 佐藤　一宏（総長室社会連携教育課長）、 阪下　利哉（総長室社会連携教育課）
今後に向けて	2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、ボランティア活動を含む課外活動が制限されるなか、例年春学期に募集を行い、6月に授与していた奨学金の採用活動は、秋学期に延期され、12月の授与となった。 例年、チラシや学内掲示板での広報を行っていたが、2020年度は、ホームページや学内eポートフォリオ「立教時間」を中心とした広報となった。また、対面で実施していた説明会や授与式も、Zoomを使用したオンライン開催へと変更となった。 2020年度は、「PAS(Physical Activity Support)プログラムにて健康長寿社会を目指す」に、36万円の支給となった。 この企画は、韓国からの留学生である受給者が主催するNPO「DANDI健康運動協議会」の活動である、高齢者に対する健康増進支援プログラムによって、韓国の健康長寿社会を目指すという取り組みである。今回は、その活動で使用される改良された器具を製作し、活動領域を広げたいというものであった。NPOの活動では、健康増進支援プログラムの実施のみならず、そのプログラムの指導者の育成も行われている。 今後の予定は、2021年3月上旬に活動・決算報告書が提出されることになる。また、例年活動終了後に受給者の学生はキープ協会・清泉寮を表敬訪問し、キープ協会関係者に活動の報告を行い、ポール・ラッシュ記念館を見学するなど、交流の機会が与えられる。 2020年度は、韓国での活動が対象となり、近年、受給者の活動の場の国際化が進んでいる。 オンライン中心の採用活動となったが、オンラインは、時間や場所の制限がないというメリットもあり、新型コロナ対応に関わらず、今後も活用していくことを検討したい。

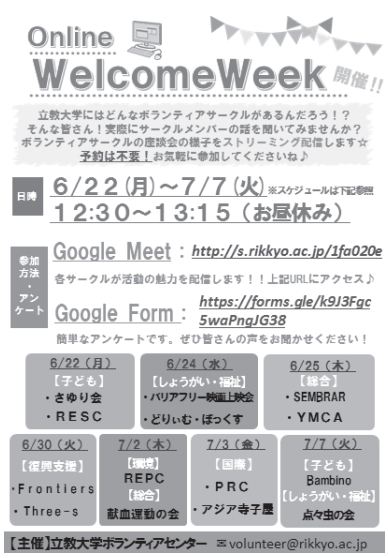


オンライン授与式の様子

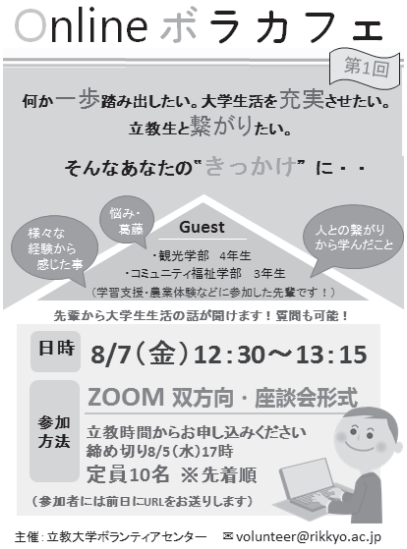
Ⅴ. 開催ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ報告

開催ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ一覧

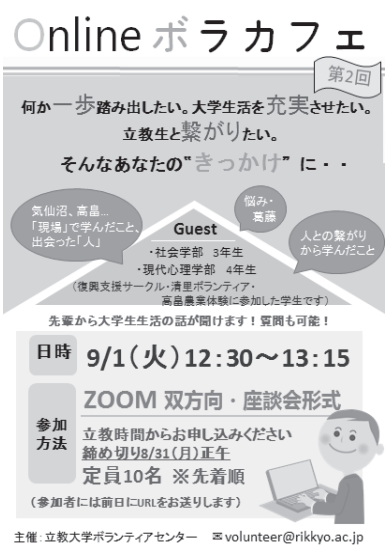
2019年度			2020年度				
時期	プログラム名	テーマ	時期	プログラム名	実施状況	実施方法	テーマ
春学期			春学期				
4月	ボランティアオリエンテーション	知る		→	中止		
	ボランティアWelcome week part1	学ぶ		→	中止		
5月	ボランティアWelcome week part2	学ぶ		→	中止		
	ボランティアOnedayプログラム ～ボランティアをはじめるきっかけ作りに～	動く		→	中止		
	海外ボランティア講座 「行ってみよう！海外ボランティア」	学ぶ		→	中止		
	ボランティア・カフェ	知る		→	8月以降実施		
6月	「夏休みボランティア」セミナー	知る	6月	→	中止		
	ボランティアプレサミット①	知る		→	※10月に 1回のみ開催		
	ボランティア・カフェ	知る		→	8月より開始		
				Online Welcome Week①		オンライン	知る
				Online Welcome Week②		オンライン	知る
				Online Welcome Week③		オンライン	知る
				Online Welcome Week④		オンライン	知る
7月	ボランティア・カフェ	知る		→	8月より開始		
			7月	Online Welcome Week⑤		オンライン	知る
				Online Welcome Week⑥		オンライン	知る
				Online Welcome Week⑦		オンライン	知る
8月	筑波大学付属桐が丘特別支援学校 への授業協力	学ぶ		→	中止		
				ボランティア・カフェ①		オンライン	知る
秋学期	一貫連携教育・立教学院 清里環境ボランティアキャンプ	動く	秋学期	→	中止		
			9月	ボランティア・カフェ②		オンライン	知る
9月	農業体験 in 山形県高畠町	動く		→	中止		
10月	ボランティア・カフェ	知る	10月	ボランティア・カフェ③		オンライン	知る
				ボランティアプレサミット		オンライン	知る
11月	海外ボランティア講座（秋学期）	学ぶ		→	中止		知る
			11月	ボランティア・カフェ④		オンライン	知る
	ボランティアプレサミット②	知る		→	※10月に 1回のみ開催		
	ボランティア・カフェ	知る					
	筑波大学付属桐が丘特別支援学校 職業訓練受け入れ	学ぶ		→	中止		
	南魚沼市立栃窪小学校交流と 「栃っ子米」販売	動く		→	中止		
12月	メサイア演奏会招待	動く		→	中止		
	バリアフリー映画上映会 「だれでも楽しい映画会」	動く	12月	バリアフリー映画上映会		オンライン （新座）	動く
				平野センター長講演会・座談会		新座	学ぶ
				ボランティア・カフェ⑤		オンライン	知る
2020年			2021年	オンデマンド海外ボランティア講座		オンライン	知る
2月	災害救援ボランティア講座（～3月）	学ぶ		→	中止		
3月	ボランティアサミット	知る	3月	ボランティアサミット		オンライン	知る



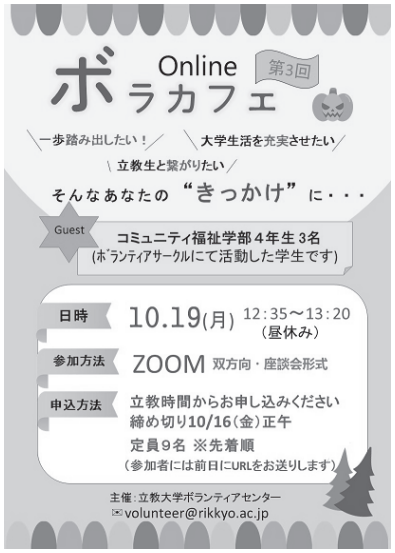
Online Welcome Week



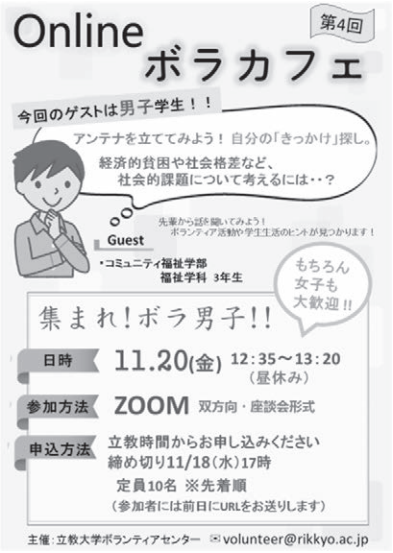
ボランティア・カフェ①



ボランティア・カフェ②



ボランティア・カフェ③



ボランティア・カフェ④

ボランティア・カフェ⑤

バリアフリー映画上映会

1. 学生の関心、問題意識の喚起

バリアフリー映画上映会「だれでも楽しい映画会」

開催日時	2020.12. 11(金)13:00 開始～15:30 終了
開催方法	Zoom によるオンライン上映
タイトル	映画『バベルの学校』(監督: 監督ジュリー・ベルトゥチェリ、フランス、2015 年、89 分)
主催 協力 運営	ボランティアセンター、バリアフリー映画上映会学生実行委員会 バリアフリー映画鑑賞推進団体「シティ・ライツ」、しょうがい学生支援室 バリアフリー映画上映会学生実行委員会
目的	立教大学独自のバリアフリー上映会として、しょうがいの有無に関わらず参加者全員が「ともに映画を楽しむ」とはどういうことなのか、学生自らが考えながら、企画・運営を行う。
内容	今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、例年通りの新座キャンパスでの上映会ではなく、オンライン会議システム(Zoom)を利用した形態で実施した。 例年は新座キャンパスの近隣住民の方や、しょうがい者の方をお招きしていたが、今年の参加対象者は学内関係者(学生・教職員)に限定して開催した。上映会を2部構成にし、前半では本学バリアフリー映画上映会の歴史・特色の紹介し、後半は映画のオンライン上映を行った。
バリアフリー対応	映画本編日本語字幕・音声ガイド付き、第1部手話通訳。
参加者数	53 名(内、学生実行委員会 11 名、ボランティアセンター関係者 16 名)
参加者の感想	・弱視なので、字幕を読まなくても理解できるのはとてもよかったです。自宅でリラックスしながら鑑賞できるので、むしろオンラインのほうが参加しやすいです。 ・普通バリアフリーだとすると体が不自由な人や老人などを思い浮かぶようになりがちですが、国籍や人種、宗教などの側面でもみなが差別なしに共存できることがバリアフリーだということを知らせてくれました。自分自身も外国から来た留学生であり、異国の者はどういう問題を抱えるようになるのか、その人達と共存できる社会を作るためにはどのようにすればいいのかということに関して考えることが出来ました。 ・バリアフリー上映というものを初めて観ましたが、耳からの情報のみで映画を楽しむということはとても難しい、集中力のいることだなと感じました。作品の内容も、「違い」と「共通点」、この社会での多様性について考えるうえでとても勉強になり、満足です。また、司会の方、紹介動画のナレーションがとても上手でした！ ・リアルな場で皆さんと同じ空間を共有できないというデメリットはありますが、一方で距離や時間の制約があまりなかったので、気軽に参加申し込みできたと思います。
今後に向けて	今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、一度も対面でのミーティングが出来ず、週1回昼休みのオンライン(Zoom)でのミーティングのみで準備を進めてきた。 夏の段階で対面ではなくオンラインでの映画上映ということが決定し、また映画選定からやり直し、どういう上映会ができるか話し合いを重ねた。 顔を合わせないミーティングのみで、学生実行委員会のメンバー同士横での連携を取るのが非常に難しく、また前年度と上映の方法が変わったため、ゼロからのスタートとなり、学生とのやりとりに非常に苦労した。当初の映画会のコンセプトは「多様性を認め合い理解する」ということだったが、自分たちにとっての「バリア」とは何か、この状況下改めて向き合うことになった。 学生実行委員会に関わる学生は、非常に内向的な学生が多く、且つオンラインのみのつながりであったので、連絡を取ることすら難しい時もあった。適宜コーディネーターが間に入り助言しながら、学生が主体性をもって活動に関わることができるよう配慮した。また今年度は、オンライン上映会での技術的なサポートのことも考慮し、上映会の参加者を学内関係者(学生・教職員)に限定し、事前予約制とした。 例年通りのバリアフリー対応(音声ガイド・移動サポート・文字通訳・点字・ディスプレイ制作)ができず、また高校生のボランティア参加もなかったが、上映会の前半部分で、学生実行委員会の活動紹介や、映画を視聴するにあたっての注意事項を説明

	する動画をオリジナルで作成した。 　バリアフリー映画上映会は今年で 11 年目を迎え、新型コロナウイルス感染拡大による社会情勢の変化に伴い、活動そのものの意義や運営方法を再考するターニングポイントを迎えている。今までのようなバリアフリー対応が難しく、次年度もオンライン上映になる場合、どうやってオリジナリティを加えて新しい形にしていくかが課題である。

上映会当日の様子

2. 各種ボランティア講座、講演会の充実

(1)Online Welcome Week

開催日時	2020.6.22(月)、6.24(水)、6.25(木)、6.30(火)、7. 2(木)、7. 3(金)、7. 7(火) 12:30～13:15 （昼休み） ※オンライン開催 ※2019 年度は、各キャンパスに分かれて、それぞれ2回実施 池袋 2019. 4.22(火)～4.26(金) 9:00～17:00 新座 2019. 4.8(月)～4.12(金) 9:00～17:00
開催場所	オンライン(Google Meet によるストリーミング配信)
内容	毎年4月に、「新入生オリエンテーション行事」の一環として、ボランティアオリエンテーションを開催し、学内のボランティア関連部局の紹介、ボランティアセンターの活用方法、学生ボランティアサークルの紹介などを行っているが、今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止となった。 そこで、新入生や在学生に向けた、各学生ボランティアサークルの発信の場として、オンライン会議システムを使い、所属メンバーが自らのサークルを紹介する企画「Online Welcome Week」を開催した。両キャンパスで活動するボランティアサークルのうち、活動のカテゴリーに分け、1回につき2団体を7日にわたり紹介した。 各回とも、ボランティアコーディネーター2名と各サークルの代表数名までの構成で、プレゼンテーションや質問を交えながら座談会形式で進める様子を Google Meet によるストリーミング配信にて行った。各サークルの活動の魅力、活動をはじめたきっかけ等、サークル活動を通じたボランティアの楽しさを直接届ける良い機会となった。 予約不要で、「お気軽に参加できます。」と宣伝したことが、学生にとって参加しやすい理由のひとつになったのか、短い昼休みの時間に、延べ 437 名の参加(昨年度の参加者は、両キャンパスで計 214 名)があった。ボランティアサークルへの関心の高さを窺うことができ、また参加人数の推移から、興味関心への傾向も知ることができた。オンライン化することにより、興味のあるサークルの情報がキャンパスを越えて収集できるということは、学生にとってもメリットがあったと思われる。 なお、イベント開催情報は、学内eポートフォリオ「立教時間」のイベント掲載ページと、ボランティアセンター専用の SNS(Instagram、Twitter)上で告知し、また事前に URL と Google フォーム(事後アンケート)を掲載した。立教アカウントを有する在学生・教職員のみがアクセス可能な設定で案内した。 ＊参加サークル／【カテゴリー】(参加人数) 6.22(月) 日曜学校さゆり会、RESC／【子ども】(116 名) 6.24(水) バリアフリー映画上映会学生実行委員会、ボランティアパフォーマンス サークルどりいむぼっくす／【しょうがい・福祉】(50 名) 6.25(木) SEMBRAR、立教 YMCA／【総合】(49 名) 6.30(火) Frontiers、東日本大震災復興支援団体 Three-S／【復興支援】(91 名) 7.2(木) REPC、立教献血運動の会／【環境】【総合】(25 名) 7.3(金) PRC(Philippines relationship club)、立教大学アジア寺子屋 ／【国際】(69 名) 7.7(火) Bambino、点々虫の会／【子ども】【しょうがい・福祉】(37 名)
今後に向けて	キャンパスに立ち入ることもできず、授業でも課外活動でも、同じ大学の学生たちに会うことのできない中、「Online Welcome Week」の開催は、学生同士、またボランティアセンターと学生のつながりを持つ一つの良いきっかけとなった。 春先から、サークルの学生は皆、新型コロナウイルス感染拡大の影響で「活動することもできず、新歓活動を行うこともできない」という問題を抱えていた。いかに自分たちの活動を継続していくのか、また新入生を中心とした在学生にどのようにアピールをしていくのかということに悩まされていたが、この時期に「Online Welcome Week」を開催したことは、サークル支援の面からも、有意義なものとなった。 このようなイベントで、サークルの学生たちが、活動の理念や楽しさ、やりがいを発信

	できたことは、アウトプットの場としても非常に意味があったと思われる。限られた時間の中で準備を行い、当日学生たちがとても生き生きとした表情で活動の話をする様子は、画面越しではあっても、参加者に十分に伝わるものであり、加えて、ボランティアセンターのスタッフも学ぶものが多くあった。 　また、本イベント終了後に、サークルの学生の多くから、お礼の連絡があったことは、大変喜ばしいことであった。例年の対面形式の同じようなイベントでは、あまりなかったこともあり、このような学生の反応からも非常に意味があるものであったと感じた。 　しかしながら、当センター初のオンラインイベントということもあり、配信にあたっては、毎回、ハプニングがつきものであった。スタッフも交替で在宅勤務であり、学生も自宅からの接続となるため、動画の再生や、学生とのやり取りなどでも苦労し、工夫しながら対応していかなければならない場面が多々あった。 　スムーズに進行するために、各回のプログラム終了後に、スタッフ間で振り返りを欠かさず行い、事前注意事項の周知や当日の進行・記録、動画の再生のタイミングや方法など、反省点を話し合い、改良を重ねた。 　次年度も、今年度開催した本イベントを基に、学生たちのニーズにかなった新たな内容を盛り込みながら、ボランティアに関心のある学生と各ボランティアサークルとをつないでいくことのできるよう支援していきたい。

(2)海外ボランティア講座

オンデマンド「海外ボランティア講座」

開催日時・場所	ボランティアセンターホームページでのオンデマンド配信
主催 共催	ボランティアセンター 認定 NPO 法人 CFF ジャパン 特定非営利活動法人 グッド 特定非営利活動法人 JHP・学校をつくる会
開催の経緯	「海外ボランティアや海外ワークキャンプに興味・関心がある」、「海外での経験を今後のキャリアに活かしたい」等の学生を対象にオンデマンドの海外ボランティア講座の配信を開始した。 海外ボランティア講座は、例年、春学期と秋学期に、対面で実施していたが、2020 年度春学期は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となり、秋学期の開催については、春学期に開催したオンライン・ウエルカムウィークのアンケート結果により、新入生の海外ボランティアに対する関心が非常に高いことが判明したこともあり、どうにか開催できないか検討を重ねた。 しかし、海外渡航やボランティア活動など対面での課外活動を行うことが困難な状況も鑑み、対面での開催はもとより、オンラインのライブでの開催についても、難しいという判断となった。 しかしながら、このような状況下でも、学生の関心の高い海外ボランティアの魅力を発信し続けることは重要であると考え、また、この状況が緩和された段階で、すぐに海外ボランティアの活動が再開できるように今のうちに準備をさせる必要もあると考えた。さらに、このまま中止や延期の期間が長期化すると、学内外で有する海外ボランティアに関するノウハウが失われていく可能性などを考慮し、継続して海外ボランティア主催団体の情報や参加学生の体験談を学内に蓄積していく必要性が認識され、海外ボランティア講座をオンデマンド配信で行うことになった。
準備	本学の学生の参加実績が特に高い海外ボランティア主催団体に呼び掛け、①団体紹介、②他団体と比較した団体の特徴、③例年の募集プログラム、④概算の参加費用、⑤参加にあたっての注意事項、⑥立教生に向けたメッセージの動画を作成いただいた。 また、今回、紹介する海外ボランティア主催団体から参加した学生に、活動のまとめとこれから参加する学生へのアドバイスからなる体験談の動画の作成を依頼した。 なお、海外ボランティア主催団体、参加学生の体験談は、今後、随時追加する予定である。 これら動画と合わせて、ボランティアセンターでは、海外ボランティア講座の趣旨や現時点での注意点などの説明する動画を作成し、ボランティアセンターのホームページに、オンデマンド「海外ボランティア講座」として公開する準備を行った。 また、一方向とならないように、オンラインで質問を受付けられるようにした。
	2021 年 2 月 5 日(金)より配信を開始した内容は、以下の通りとなる。 はじめに ボランティアセンターの説明動画 海外ボランティア主催団体の紹介 認定 NPO 法人　CFF ジャパン紹介動画 特定非営利活動法人　グッド紹介動画 特定非営利活動法人　JHP・学校をつくる会紹介動画 参加者の体験談 2016 年 韓国「日韓交流キャンプ」参加体験談動画 コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科4年次　長壁　唯

	2019 年ミャンマー「ミャンマースタディーツアー」参加体験談動画 文学部文学科(文芸・思想専修)4年次　清水　綾乃 2020 年マレーシア「マレーシアワークキャンプ」参加体験談動画 現代心理学部心理学科3年次　高橋　歩実 2019 年カンボジア「カンボジア体験ボランティア」参加体験談動画 経営学部経営学科2年次　佐藤　花凜 質問・問合せ
今後に向けて	今後、春学期と秋学期に、情報を追加し、蓄積していけるように、海外ボランティア主催団体と良好な関係を維持していく必要がある。 また、海外渡航制限などの情報の収集にも、注力する必要がある。 質問・問合せに寄せられた情報を集約し、海外ボランティア主催団体にフィードバックし、また、学生のニーズを反映した動画を作成していくことが、課題となる。

オンデマンド配信の様子

3. 学生活動支援

(1)ボランティアクラブ

① 立教エコキャップ推進委員会(Rikkyo Eco-cap Promotion Committee)の活動

テーマ	学生ボランティア団体立教エコキャップ推進委員会(REPC)の活動展開
目的	①社会的貢献に寄与すること。 ②清掃業者の方々の負担を減らすこと。
活動概要	①立教大学を中心として学内外においてエコキャップ運動を展開する。 ②学生ボランティアサークル「REPC」を立ち上げ、継続的な活動をめざす。
学内	①池袋キャンパス内に8か所ペットボトル回収ボックスを設置する。 第一食堂、レストランアイビー、山小屋、9号館食堂、図書館入口、メイザーライブラリー、ポール・ラッシュ・アスレティックスセンターなど ②回収したキャップはまとめてボランティアセンターへ持参する。
今後について	2019 年度にサークルが設立され、上記の活動を行っていたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、春学期はキャンパスへの立入制限もあり、活動も制限される中、夏季休業中に、サークル代表よりメールにて活動再開を希望する相談があった。 当該サークルは、昨年度まで設立の経緯や引き継ぎ、また活動に関しても、自主的な運営には至っておらず、今年度、活動が継続されるのかどうか危ぶまれる部分もあったが、新しい幹部学生については、コロナ禍の制限の中でも、自分たちの活動内容を見直し、今できる事を前向きに捉え活動する意気込みが感じられるようになった。 8月から計3回の web 面談を行い、活動の具体的な内容について相談する中で、活動への意欲はあるものの、「(自分たちの)回収物をボランティアセンターに預けることは可能か？」等の質問もあったことから、当センターの支援のあり方を踏まえてメンバー間の自助努力を促した。その結果、メンバー間でエコキャップに加えて古着も回収し、集約したものを自分たちで手配した業者に渡すところまで、自主的に動く方向に進んでいる。 しかし、キャンパス内でのキャップ回収活動は、他部署への理解・協力から取りまとめを当センターが担っている部分があり、その点に関しては、次年度また学内での活動が再開する際には、改めて面談の機会を設け、認識してもらう必要があると考える。

② 東日本大震災復興支援系サークルの活動(Frontiers、Three-S)

テーマ	東日本大震災復興支援系サークル Frontiers、Three-S の活動展開
活動概要	・年数回、東北を訪問し、地域の人々との交流・出会いを大切にする。 ・被災地に赴き、現在の被災地の姿、残された課題に取り組む。
相談概要	これまで、年に数回現地を訪問し、活動の主な内容が、地元の人の話を聞きながらの交流が中心であったサークルの学生にとって、新型コロナウイルス感染拡大の影響で現地に行くことができない状況は、大変大きな打撃となった。 震災から9年が経ち、現地の人は、「来てくれるだけでいい。」と言ってくださるものの、「本当に行くだけでよいのだろうか…」と、支援のあり方について悩み、またメンバーのモチベーションなども問題になっていた。そのような中、コロナが追い打ちとなり、サークル内で定期的な Zoom ミーティングを行っても、参加する学生は半数程度であることを、6月の web 面談の際、幹部学生は悩んでいる状態であった。 これらの悩みは、2つのサークルに共通していたこともあり、まずは、学内の同じ震災復興支援のサークル同士横のつながりを持ち連携を深めていくことができればと、陸前高田サテライト事務局のスタッフの協力も得て、話し合う機会を設け、定期的に面談を続けている。 他大学の復興支援サークルとの連携や、現地への訪問はできなくても、キャンパス近隣の小学校で防災等について自分たちの経験を伝えていく活動等についても提案した。このように可能性を検討していく中で、10 年目の「3・11」に向けて、何か「今までとは違う活動だが、形に残るものを行う」という方向に目標が定まった。 一時期は、サークルの存続自体をも悩んでいたこともあったが、「辞めることは簡単

	だが、続けることに意味がある。」と伝え続け、他のサークルとのつながりの中、従来のものにこだわらない形で新しい再スタートを切って、今、動き始めている。
今後に向けて	上記の10年目の「3・11」では、それぞれの「3・11」の記憶を語っていただき、記録（アーカイブ）に残すという活動を柱に進んでいく方向性が決まった。この後10年後の大学生にもどう伝えたいか、後の世代に伝える復興支援の意義等も考えながら、これまで関わってきた現地の人たちに加え、移住者などの声も集めていくようである。また、OB・OGの協力を得ることもアドバイスしている。 しかしながら、動画を作る計画に、なかなか人が集まらず、また、現地の方々との予定調整の難しさなどからメンバーの活動意欲が落ちてきている部分も否めない。心配しているOB・OGもいる中、現役の学生の動きが停滞している状態である。 スタッフ側は、状況を見守り、今後もよく話し合いながら、より適切な支援を行っていきたいと考える。

③ バリアフリー映画上映会の活動

テーマ	「ダイバーシティ（多様性）を認め合う」をコンセプトに、しょうがいの有無に関わらず皆が楽しめる映画会をつくる。
活動報告	今年度も代表（新座）、副代表（池袋）の学生、各班の班長からなる「本部員」メンバーが中心となって約10か月の間活動を進めてきた。4月の活動開始の時点で、映画会のコンセプトや活動方針を決定し、週に一度オンライン（Zoom）での昼のミーティングを行って準備をしてきた。 オンラインでのミーティングでは学生同士の情報共有や意思疎通がうまくとれず、話し合いが進まないことが多く、例年以上に労力を費やした。コーディネーターが毎回ミーティングに参加し助言をしながら、逐一進捗状況を確認した。 加えて、夏の時点で対面での上映会開催が難しいことがわかり、急遽オンラインでの上映会実施に変更となった。上映作品の変更も余儀なくされ、今までのバリアフリー対応が難しくなり、どうしたら立教らしいバリアフリー映画上映会ができるか学生とボランティアセンターで何度も話し合いながら検討を進めた。 当初は、例年通りの文字通訳・音声ガイド・移動サポートなどのバリアフリー対応ができず、学生たちの中にも少なからず戸惑いの色が隠せなかったが、次第に立教らしさの溢れるオンライン上映会をどう作り上げていくかアイディアが出て来るようになった。対象者も学内関係者（学生・教職員）限定となったが、「学内でのバリアフリー映画上映会の周知につなげよう」と意識を変えて取り組んだ。また、映画の上映前に例年の活動紹介の動画を流すなど、直接集まることのできない中、自分たちにできることを模索し本番を迎えた。
今後に向けて	今年度の課題も、学生同士の横の連携がうまくいかなかったことである。 「何のために、だれのために映画を上映するのか」「バリアフリーの意味」などの根幹になる部分を学生、ボランティアセンター共に考え共有していく必要がある。オンラインでのミーティングはどこからでも参加ができるメリットはあるが、学生の主体性が現れにくいというデメリットもある。 新型コロナウイルス感染拡大の影響より、来年度もオンラインの映画上映会になる可能性が高い。次年度に向けて、バリアフリー映画上映会のコンセプトも含め、学生とボランティアセンターで再度話し合いをし、映画会をゼロベースから作り上げていく必要がある。映画会自体の目的や意義もきちんと共有した上で、「バリアフリーとは何か？」という原点に立ち戻って、学生とボランティアセンターが共に新しい上映会の形を作っていくことができればと考える。

4. 国内キャンプの主催、プログラム開発

※新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2020 年度の開催は中止のため、今年度の本報告書では、昨年度の概要及び、これまでの参加学生の声を掲載します。

(1)一貫連携教育・立教学院清里環境ボランティアキャンプ

＜2019 年度概要＞

開催日時	2019. 8.15(木)～ 8.17(土)
開催場所	山梨県北杜市高根町清里、公益財団法人キープ協会　キープ清里キャンプ場
主催 共催	学校法人立教学院、立教大学ボランティアセンター 公益財団法人キープ協会
内容	立教学院の一貫連携教育の目標の一つである「共に生きる力を育てる」をテーマに、①自然から学び自然と共に生きる方法を学ぶこと、②環境問題に関心を寄せ、その環境を守るために力を合わせること、③年齢や学校が違う参加者が共に参加して理解を深めあうこと、を目指し、立教学院の児童・生徒・学生・教職員が清里の地に一堂に会し、キャンプ開始以来、活動の柱としてきた環境整備に関わるボランティア活動を行った。 今回、立教学院に託された環境ボランティアは【自然歩道「カラマツ林の小径」の整備】であった。自然歩道の中で、「カラマツ林の小径」は、さまざまな種類の動植物を観察できるほか、新緑や紅葉を楽しむことのできる人気の高いコースだが、雨が続くと大きなぬかるみができたり、本来は道ではない部分に道が出来たりする整備が必要な場所である。作業当日は、「利用者が不安なく安全に歩けるようにしよう」と気持ちを一つにして作業に取り組んだ。 初日は、グループ毎に1枚の模造紙にグループの目標、個人の目標・役割をまとめ、メインホールに貼り出した。2日目はキープ協会レンジャーの指導の下、泥まみれになりながら黙々と作業に汗を流し、最終日はグループ毎に振り返りシートを作成し、お互いの成果を発表しあった。雨天のために残念ながら「ナイトハイク(星空体験)」は実施できなかったが、大学生企画によるアイスブレーキングやレクリエーション、高校生と大学生との交流会なども行われ、異年齢間での楽しく有意義な交流の時間を持つことができた。 【主なプログラム】 8.15(木)　開会礼拝、オリエンテーション、ポール・ラッシュ記念館の見学、目標・役割づくり 8.16(金)　環境整備ボランティア活動(自然歩道「カラマツ林の小径」の整備)、レクリエーション、高校生と大学生の交流会 8.17(土)　振り返りシート作成、閉会礼拝
参加者数	小学校:32 名、池袋中:7名、池袋高:4名、新座中:3名、新座高:3名、 大学:12 名、各学校スタッフ:9名、合計 70 名

＜参加学生の声＞
「一貫連携教育・立教学院清里環境ボランティアキャンプ」を経験して

コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科2年　富田紗彩

このボランティアキャンプで感じたことは立教学院で学ぶ小中高生のチャレンジ精神と好奇心、協調性の高さ、それから豊かな想像力である。

私は山の中での作業に気合を入れていたが、いざボランティアを本格的に行う日になると、小中高生が自ら率先して作業をしてくれた。作業の準備を一生懸命やる彼らの姿は、義務感というよりも「やってみたい」という気持ちが溢れているように感じた。長い木の枝を切り分ける作業のときには班の全員が「自分が切りたい」と口にしたので、喧嘩になるかなと心配になり声を掛けようとした。

すると2度目の参加である小学校6年生が「低学年の子から切っていこう」と声掛けをして班をまとめてくれた。その行動は私にとってとても意外だったので感動した。その子は今までリーダーである大学生に対して少し反抗的な態度を取ることが多かったからだ。一見反抗的でわがままであっても、しっかりと周りを見て判断できるのだと思った。

一時の感情や態度だけで他人を判断し決めつけてしまうのは間違っているということを改めて心に刻みつけることができた瞬間だった。

私はこのボランティアキャンプに参加して以降、会議などの場で積極的に意見を言うようになった。これは小学生の「自分が言いたいことを言い、やりたいことをやる、そしてそれを実行する」という姿勢から影響を受けたものである。

小学生の「自分がやりたいこと」に対して取り組む姿勢は単に自分勝手な行動とは違うもので、どこかかっこ良く感じた。人は大人になると周りの空気を読みすぎてしまい、やりたいことや言いたいことを自分自身で抑制してしまう気がする。そのような悪い意味で大人びた行動は、周りに気を使っている行動であるとは限らないということを、小学生の真っ直ぐな心から学ぶことができた。

また「清里環境ボランティアキャンプ」の魅力として、2つの「つながり」を感じられるということがある。

1つ目は「自然と人間のつながり」だ。私の班の高校生は「日頃は部活づくしで清里のような自然豊かな場所には行ったことがなかったため、森に入った時は心がなんとなく浄化されていくような気がした」と話をしてくれた。

私はこの意見に共感した。森に手を加えることは、人間が自然界を侵食してしまうことなので良くないことだと頭で考えていた。しかし実際に現場に立ってみると様々な課題が浮かび上がり、それを解決するにはどうしたらいいのかについて年齢の壁を超えてみんなで考えていた。

そして実際に行動に移すときには、一人ひとりが今自分はなんの作業をするべきなのかを考え、お互いに声を掛け合いながら作業した。これらのことは日頃学校で勉強できるものではない。

このように森などの自然は、私たちに「教育の場」を提供してくれた。人が自然と関わることで私たちは自然の良さに触れることができる。すると、そこから自然を守りたいという意識が生まれる。そのため、自然に人間が手を加えることは決して悪いことだけではないと思うようになった。大自然の中でのボランティア活動で、自然の偉大さと、その中での人と人、人と自然のつながりを感じた。

2つ目のつながりは「立教」だ。このボランティアキャンプが終わる頃には、はじめ、なかなか名前を呼んでくれなかった人ともあだ名で呼び合うようになるほど全員と仲良くなり、解散のときには寂しくなるほど親しくなることができた。来年またキャンプで会えることを共に願った人もいるほどである。これは参加者の人柄の良さが反映されたものかもしれないが、そこに「立教」という共通のつながりがあるからこそ生まれた絆であると感じた。

2泊3日という短い時間ではあったが、その前の準備段階のことを考えると長旅であったように思える。事前研修段階でも学ぶことは数多くあったものの、本番の3日間で自然や他世代の仲間から学んだことはとても大きかった。「清里環境キャンプボランティア」を通して出会ったたくさんの思い出は全て私の宝物となった。このキャンプが行われるきっかけとなった全ての方々や全てのもの、そして機会に感謝したい。来年以降もこの素晴らしいキャンプが続いていくことを願っている。

活動の様子

(2)夏季フィールドワーク、農業体験 in 山形県高畠町

＜2019 年度概要＞

開催日時	2019. 9. 2(月)～ 9. 7(土)
開催場所	山形県東置賜郡高畠町和田民俗資料館、ゆうきの里・さんさん
共催	上和田有機米生産組合
内容	【事前学習】 第1回(7.13)は、参加学生の交流を深めることと、「高畠」という地での経験を前に何に向き合うか、各自の目的をしっかり意識するための研修を行った。次回の研修会に向けて、各グループに「高畠町」「有機農業～食文化・米」「有機農業～環境・自然」のテーマを分担した。 第2回(8.28)は、参加学生の仲間同士や高畠とさらに近づき、それぞれが持つ学びの意識を支えあうため、佐藤一宏総長室社会連携教育課課長が「高畠と立教大学がともに紡いできたもの」というテーマで講話した。その他、それぞれの参加動機を共有し、互いに支えあう関係づくりを行った。 【現地プログラム】 9. 2(月) 援農、渡部宗雄組合長による講演 「上和田有機米生産組合の歴史と未来」、ふりかえり 9. 3(火) 援農、組合青年部との交流「高畠で農とともに生きる」、ふりかえり 9. 4(水) 援農先で民泊1日目、ふりかえり 9. 5(木) 援農先で民泊2日目 立教卒業生との交流「人生の選択」、ふりかえり 9. 6(金) 援農、発表会、交流会、ふりかえり 9. 7(土) 初代組合長菊池良一氏によるそば打ち体験 【事後学習】 10.5(土)に行われた事後研修会では、ふりかえり集を配布し、それぞれの参加動機(目標)に立ち返った。
参加者数	15 名(男6名・女9名)、スタッフ3名

＜参加学生の声＞
「農業体験 in 山形県高畠町」を通して

法学部政治学科3年　井上果奈

農業体験では、「生命」とは「人生」とは、「食べる」とは何か、考えるきっかけをもらい、人の温かさに触れることができた。

援農に行く前はあくまでもお手伝いしに行くという気分でいたが、実際は農家の方と同レベルの作業をこなすことが求められた。自分が頼りにされたことが嬉しいものの、不安もあった。

しかし、着々と作業を進めて行く中で、額から落ちる汗を拭って青空を見上げた時、かつて感じたことがない程の達成感と幸福感を得た。振り返ってみると、自分の歩んだ軌跡がはっきりとあった。刈り取られ大きいロール状になった飼料用の稲がいくつも転がり、田んぼは丸裸になっていた。農作業は目に見えて自分の成し遂げたことがわかるため、達成感をより強く感じられた。

大袈裟に聞こえるかもしれないが、自分の存在理由を一つ見つけた気がした。私の行動の一つひとつがいつか誰かの糧となり、生命をつないでいくのだと思うと、妙に誇らしい気持ちになった。

そして、自分で何かを産み出すことの尊さを深く実感した。私は今までに何かを全力で成し遂げたという体験がなく、そんな自分の人生に飽き飽きしていた。しかし、農作業という「食」を通じて「生命」に直接関わる大事な作業を成し遂げたことで、少し自信がつき、人生への向き合い方が変わったように思う。

華々しいことを成し遂げるだけが人生への糧になるのではなく、地味な単純作業から得られることも沢山ある。どんな経験から何を得るかは自分次第なのだと思った。

また、農家の渡部五郎さんが「今みんながここにいるのは奇跡だ、沢山の選択を経てみんなは今ここにいる」とおっしゃっていた。懇親会では、渡部郷士さんに二浪したことを告げると「志望校に受かっていたら確実に今ここにはいない」と言われた。これらを聞いたとき長い間、心に巣食っていたモヤモヤが晴れた。

私が選んできた道は間違いではなかったと思った。自分の人生に誇りが持てた瞬間だった。「高畠に来ることができてよかった、立教に来てよかった」と心底そう思えた。

ロール状になった飼料用の稲が沢山転がっている丸裸の田んぼを思い出し、私が一つひとつ選択した道が全てつながった気がした。様々な選択によって今の私がいると思うと晴れやかな気持ちになった。

それから、実際に生産者の一助となったことで、食のありがたみがわかった。我々が何気なく残している食べ物も、沢山の愛情や労力がかかっているということを知った。我々はもっと生産者に敬意を払い、食べ物を大切にしなければならないと一層思った。

高畠には沢山の魅力がある。それは人の温かさや食べ物の美味しさだ。高畠の方々は、我々を温かく迎えてくださった。たった5泊6日の関わりの中でもとても優しく、真剣に向き合ってくれた。高畠の皆さんは家族のように接してくださり、その居心地の良い温かさがとても嬉しかった。

私は高畠が大好きになった。今でも高畠の方々との交流は続いており、高畠は私の心のふるさとのようになっている。どこかで高畠の話を聞くと誇らしい気持ちになるし、台風で被害を受けたと知った時は胸が潰れそうになった。私が高畠を大事に思う気持ちは、東京に帰ってきてからも大きくなっている。短い期間しか関わっていないのに、大事に思える存在に出会えたこと、それ自体が奇跡のようなことであると思う。

それに、高畠の食べ物は本当に美味しい。とれたての新鮮な食べ物は東京のスーパーで買うものとは全然違うのだ。とれたてであるということはそれだけ生き物の「生」「命」を感じやすい。食べた瞬間に、自分の体の中が潤う感じがある。自分で手入れしたものを食べるとき、大地とのつながりをひしひしと感じられる。高畠から帰ってきて東京で同じものを食べても、何かが違う感じがした。

高畠では様々な学びがあった。行く前と行った後では、全く違う感覚が自分の中にある。言葉にはできない感動を手に入れることができ、実りの多い5泊6日だった。

活動の様子

(3)上和田有機米生産組合の「特別栽培米」販売等実施

日　程	申込期間: 2020.10.5(月)～10.15(木)
内　容	昨年度までは、池袋キャンパスの学食内に、今年度農業体験に参加した学生が自分たちの体験を紹介するパネルの展示やチラシの配布などを行っていたが、今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、農業体験が中止になった。 約 30 年間続いてきた農業体験が初めて中止となったことで関係が途切れてしまわないよう、上和田有機米生産組合関係者の方々約 25 名に、暑中お見舞のはがきを送った。 また、2018 年度、2019 年度に農業体験に参加した校友や職員を対象にメールで呼びかけ、山形県高畠町上和田有機米生産組合の特別栽培米を販売することとなった。注文は、Google フォームへの入力で管理し、約 50 名、計 220kg の注文があり、キャンパスで受け渡しを行った。 そして、上和田有機米生産組合と本学との長きにわたるつながりも考え、校友会が、コロナ禍における学生支援策の一つとして、有機米を学生に贈呈することも決定した。当初1人当たり5kg を 100 名分贈呈予定だったが、希望者が予想以上に多かったため、920 名分に増枠された。

5. その他のプログラム

(1)ボランティアプレサミット

開催日時	2020. 10.21(水) 12:30～14:30 ※オンライン開催 ※2019 年度は、下記要領にて開催 第1回:2019. 6.10(月)12:35～13:15、第2回:2019.11.21(木)12:25～13:15 池袋キャンパス 5号館1階第1会議室 新座キャンパス 7号館2階会議室
開催場所	オンライン(Zoom によるミーティング形式)
参加者	【プレサミット参加団体】 計 17 団体、29 名 1. R.S.C.C(Rikkyo Sea Cleanig Circle)、2. ＲＥＰＣ(立教ｴｺｷｬｯﾌﾟ推進委員会)、 3.日曜学校さゆり会、 4. 堀之内セツルメント(立教大学子ども会)、 5. RESC(立教教育研究会)、 6. PRC(Philippines Relationship club)、 7.東日本大震災復興支援団体 Frontiers、 8. B.S.A.第8支部、 9.立教大学 G.F.S、 10. 立教 YMCA、 11.点々虫の会、 12.子どもクラブ Bambino、 13. バリアフリー映画上映会学生実行委員会、 14.アジア寺子屋、 15.ボランティア・パフォーマンスサークル どりいむ・ぼっくす、 16.東日本大震災復興支援団体 Three-S、 17. SEMBRAR
内容	昨年度までのプレサミットは、第1回を6月、第2回を 11 月と年に2回開催し、主な活動拠点により、池袋・新座と会場を分けて行っていたが、今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、6月の開催が中止となったこともあり、10 月下旬に1回限り開催する運びとなった。 秋口にかけてボランティアサークルの幹部から、コロナ禍で、これまでとは状況が一変し、今までと同じ活動を行うことが難しいという相談が数多く寄せられていた。そこで、プレサミットを、2020 年度は予定を前倒し、この時期にオンラインで開催することにした。 オンラインで、池袋と新座の両キャンパスを超えたサークルのつながりの場を作り、少しでも学生の間で情報を共有できればと考え、ボランティアセンターの支援対象となっている 19 のすべてのボランティアサークルに、授業がある場合やどうしても都合のつかない場合を除き、できる限り参加するように呼びかけ、各サークル2名まで参加可能とした(昼食可、途中退出可)。 参加メンバーを取りまとめる際には、Google フォームを用いて、情報共有したいことや相談したいことなどを事前に集約し、学生の声を生かしたプレサミットになるよう準備を整えた。 例年は、第1回で、学生ボランティアサークルの新歓活動の報告や活動の現状について、それぞれが抱える課題を共有し、第2回で、新体制に向けた引継ぎに関するアドバイスや、次年度のオリエンテーションに向けた説明などを行っている。今回は、そのどちらの要素も取り入れながら、事前に行ったアンケート結果等を踏まえて、コロナ禍における活動の悩みを共有することに絞り内容を構成した。 1. 開会のあいさつ プレサミットの主旨・ねらいの説明 2. 学生ボランティア団体紹介(1団体約1分程度) 3. ボランティアセンターから連絡事項、確認事項 コロナ禍における活動の留意点／ボランティア保険について／ サークル幹部世代交代後の連絡先報告について／ ボランティアサミット(3月)、ボランティアオリエンテーション(4月)開催 4. サークルの現在の状況について情報共有(全体) 事前アンケートの結果内容を共有 5. サークルの現在の状況、これからの活動についてディスカッション (15 分×2回) ※Zoom のブレイクアウトセッション機能を使用

	①分野ごと　②シャッフル 例）今後の活動について、新歓について等 6. その他（連絡事項など） 司会進行は、主に両キャンパスのコーディネーターが2名交替で行った。ディスカッションでブレイクアウトセッションの振り分けを途中で変更する必要もあったため、スタッフ間で事前に十分に話し合い、設定方法や役割を共有し、何か問題が起きた際にも全員で対応できるように、リハーサルを行いながら、対処方法などの細かい部分まで共有した。 プログラムの「4.」で事前アンケートの結果内容を共有した後に、「5.」で学生同士のディスカッションという流れの中で、ともすれば、問題点や悩みの言い合いに終わってしまう可能性も考えられた。そこで、お互いに苦労していることを共有しながらも、工夫している点や参考になる情報なども共有しようと伝えた。今回の主旨にかなった話し合いができるよう、スタッフが随時各グループを巡回し、必要に応じて、学生同士が話しやすくなるような雰囲気作りを促した。 また、それぞれのグループ内で、話し合った内容や共有できたこと等を、全体への情報共有として、チャット機能で全体に簡潔に書き込むように指示した。そのことで、次のセッションがより充実したものとなり、工夫できる点なども共有することができた。そうすることで、開催側スタッフも全体的なポイントを把握することができ、最後のボランティアセンターから全体へのフィードバックも行いやすく充実したものとなった。
所感	今年度はオンラインに形を変えての開催となったが、オンラインだからこそできる効率的な機能を取り入れることで、一度により多くの情報が共有できた。 例えば、事前アンケートの結果を画面上で共有することで、グループに分かれた際に、それぞれに工夫していることを学生同士がすぐに話し合うことができることや、キャンパスの隔たりを超えて、全員で一度に話し合いや情報共有ができる点などである。 コロナ禍で、「思ったように活動ができない。」というメンバー誰もが持つ悩みに加えて、サークルの幹部学生は、「サークル内の部員間でのモチベーションの温度差」についても不安を感じており、サークルの存続そのものを危惧する代表も少なくなかった。 今回のオンラインプレサミットを通じて、学生たちは、同じ悩みを共有しながら、停滞していたサークル活動を復活させるヒントを得て、再び動き出そうと前向きになっていった。サークル同士でコラボレーションの可能性なども考えながら、横のつながりを広げていこうとする学生たちの姿はとても印象的であった。 このように、ボランティアセンターが、コロナ禍で「今できること」を考え、学生ボランティアサークルが一堂に会し、情報交換・共有するという、学内の他部署に先駆け企画したこのような学生支援は、非常に有意義な機会となった。

Zoom メインルームの様子

(2)ボランティアサミット

開催日時	2021.3.8(月) 9:30～12:30
開催場所	オンライン(Zoom によるミーティング形式)
参加者	池袋キャンパスを中心に活動している 12 団体に加え、新座キャンパスを中心に活動する6団体が以下のとおり参加して実施した。 計 18 団体 【池袋キャンパスで活動する団体】 1.R.S.C.C(Rikkyo Sea Cleanig Circle)、 2.ＲＥＰＣ(立教ｴｺｷｬｯﾌﾟ推進委員会)、 3.日曜学校さゆり会、 4.堀之内セツルメント(立教大学子ども会)、 5.RESC(立教教育研究会)、 6.PRC(Philippines Relationship club)、 7.東日本大震災復興支援団体 Frontiers、8.B.S.A 第8支部、 9.立教大学 G.F.S、 10.立教 YMCA、 11.献血運動の会、 12.点々虫の会 【新座キャンパスで活動する団体】 13.子どもクラブ Bambino、 14.手話サークル Hand Shape、 15.ボランティア・パフォーマンスサークル どりいむ・ぼっくす、 16.アジア寺子屋、 17.東日本大震災復興支援団体 Three-S、 18.SEMBRAR
内容	以下のプログラムを全体で検討し、グループワークで話し合った。 ・ボランティアサミットの意義を理解する。 ・参加団体の自己(活動)紹介 ・各団体の課題を共有 ・グループセッション(活動の現状、世代交代、SNS の活用法、オンラインで試してみたいこと等について) ・新歓活動に向けての具体的な検討

Zoom メインルームの様子

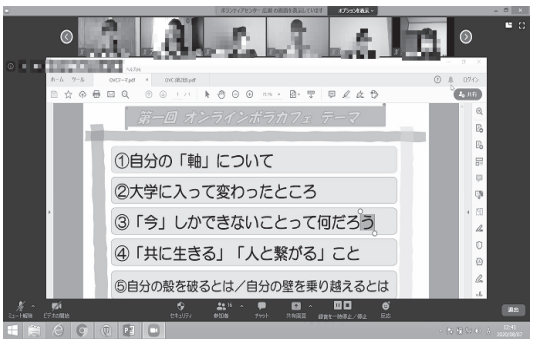
Zoom グループセッションの様子

(3)ボランティア・カフェ

開催日時	【第1回】2020 8. 7(金)、【第2回】9.1(火)、 【第3回】10.19(月)、【第4回】11.20(金)、【第5回】12.18(金) ※全5回 第1回、2回は 12:30～13:15、第3回～5回は 12:35～13:20 (昼休み) ※2019 年度は、池袋計7回、新座計6回(昼休み)開催
開催場所	オンライン(Zoom によるミーティング形式)
ゲスト	【第1回】 加藤 颯(コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科3年次) 寺井 朱里(観光学部交流文化学科4年次) 【第2回】 鈴木 美春(社会学部メディア社会学科3年次) 吉永 桂大(現代心理学部映像身体学科4年次) 【第3回】 椿 志野(コミュニティ福祉学部福祉学科4年次) 窪園 美音(コミュニティ福祉学部福祉学科4年次) 【第4回】 杉山 賢汰(コミュニティ福祉学部福祉学科3年次) 【第5回】 和嶋 美莉奈(コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科4年次) 酒井 理瑚(現代心理学部心理学科4年次) 三浦 大樹(コミュニティ福祉学部福祉学科3年次)
参加者数	【第1回】8. 7(金) 9名、【第2回】9.1(火)4名、【第3回】10.19(月) 2名、 【第4回】11.20(金) 6名、【第5回】12.18(金) 5名
内容	昨年度までのボランティア・カフェは、池袋と新座それぞれのキャンパスでテーマやゲスト学生を決めて、ボランティアセンター内あるいは会議室等から、キャンパス間をテレビ会議システムでつないで開催していたが、今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、学生のキャンパス入構が制限されていたため、すべてオンラインで開催することとし、ゲスト学生、参加学生ともに、そして、交替でスタッフも、時には自宅等からアクセスする形で行った。 当センターが開催するオンラインイベントとしては、「Online Welcome Week」に続く企画となったが、「ボランティア・カフェ」は、少人数で対話もできる座談会形式として、ただ一方的に話を聞くのではなく、ボランティア活動の経験者である学生とボランティアに関心を持つ学生が直接対話をすることで、ボランティア活動の魅力がより深く伝わり、参加した新入生や在学生が、その一歩を踏み出すきっかけになるような方法や内容を考え企画した。 各回とも、ボランティアコーディネーター2名とゲスト学生が事前に複数回打ち合わせを行い、ゲスト学生の活動経験を詳しく聴いていく中で、限られた時間で伝えていくメッセージ等を絞っていった。また、申込み人数などにより、当日、ブレイクアウトセッションを行うかどうか等、内容や流れについて、細かく微調整を行い、当日は、学生同士の関わりをメインに充実した時間を過ごせるよう話を進めた。 イベント開催情報は、学内ポータルシステムのイベント掲載ページと、ボランティアセンター専用の SNS(Instagram、Twitter)上で告知した。毎回 10 名程度の定員と、対象を1年生限定の回、または1、2年生のみに絞り、参加応募者が少ない時には、対象を全学年に広げた。学生が安心して参加できるように、申込みのあった学生の個人メール宛てに、参加 URL を案内した。 ＜概要＞ 「大学に入学したけれど、なかなか人とつながる機会がない。」「大学時代、勉強以外何をしたらいいのかわからない。」「大学の中でどうやって友だちを作ればいいの

	だろう？」…等もやもやした想いを抱えている参加学生が、ボランティアと関わりのあるゲスト学生とコミュニケーションを取りながら気軽に会話をする中で、「人とつながること」「自分の大切にしていること」「大学生活で何ができるか」など考える。 　昼休みの時間終了後は、コーディネーターは画面から退出して、ゲスト学生にホストを切り替え、授業のない学生は、そのまま少しの間学生同士で会話を継続できるように設定した。 ＜主な内容＞ 【第1回】 　高畠農業体験、清里環境ボランティアキャンプ、RSL ローカル（南魚沼）、学習支援等の経験を持つ学生による「自分の軸」「大学に入って変わったこと」「共に生きる・人とつながること」等がテーマ。 【第2回】 　東日本大震災復興支援サークル活動、高畠農業体験、清里環境ボランティアキャンプなどの経験を持つ学生による、「気仙沼や高畠の現場で学んだこと、出会った人、悩みや葛藤」「人とのつながりから学んだこと」等がテーマ。 【第3回】 　ボランティアサークル活動はじめ、東北の復興支援や地域のイベント、高齢者と関わる活動、子ども食堂、しょうがい児対象の音楽療法、高齢者施設の支援等、様々な経験をしている学生による、「興味のあるものへの探し方・関わり方」「コミュニケーションの取り方」等がテーマ。 【第4回】 　子どもたちへの学習支援活動、高齢者施設でのボランティアをはじめ、様々な社会課題に関する活動を経験している学生による、「アンテナを立て、自分の行動のきっかけを探す」「経済的貧困や社会格差等、社会的課題について考える」等がテーマ。 【第5回】 　東日本大震災復興支援、児童養護施設、高齢者施設、しょうがい者スポーツボランティア、和太鼓、オリパラ委員会、サークル運営等様々な活動を経験している学生による、「支え合うこと」「誰かのために一歩先に動き出すきっかけ」「4年間ボランティアサークルで主体的に活動する中で見えてきたこと」等がテーマ。 　課外活動の制限やキャンパスへの入構制限等で、新たな学生とのつながりが難しかったこともあり、今年度のボランティア・カフェは、これまでボランティアセンターとつながりの多かった学生を中心に声をかけ、学生と相談しながら内容を企画した。 　子ども食堂や学習支援を経験している学生の話を聞いた後で、コロナの状況が落ち着いたら、実際に活動を始めようと決めた学生もおり、また、先輩より実際の体験談を聞くことで、参加者は勇気づけられ、一歩動き出すことにつながっている。
所感	新型コロナウイルス感染拡大の影響で、未曾有の事態となり、世の中途方に暮れる人も多い中、キャンパスにも入ることもできずにいる新入生のために、「何か自分にできることをしたい。」と名乗りを上げて連絡してきてくれた学生たちの行動には、敬意を払わずにはいられない。 　また、ゲストスピーカーとして協力してくれた学生たちにとっても、準備や発表などを通じて、自身の新たな気づきもたくさんあったようである。ボランティアの経験も、その時経験しただけでそのままの状態にしていると、思い出の1ページで終わってしまいかねないが、他者と対話をすることで、経験からさらなる意味を見出し、何らかの形で自身の中で経験を位置付けていく機会になるのだと改めて感じた。 　このボランティア・カフェは、続けることに意味がある。毎回柔軟にスタイルを変えながら、今後も学生のニーズに合った形で続けていきたいと思う。
今後に向けて	以前から、本イベントの学生への認知度や広報の面で課題があったが、オンライン開催となった本年度においても、回によって人数の伸び悩みも見られた。これから動

	き出そうとしている学生の一歩踏み出すきっかけになるイベントであるからこそ、学生にとってのニーズは何かということを常に考え、内容や周知の方法も含めて、学生の目線から見たボランティア・カフェを、学生と一緒に考えながら創っていきたいと思う。 　ある時に、ゲスト学生の「学内の情報を活用しなければもったいない！」という発言に、参加学生が大いに反応していた。コロナ禍でボランティアを取り巻く状況は流動的で変化も多いが、ボランティアセンターが、学生の頼れる居場所となるよう、日頃から、学生ボランティアサークルなどとの情報交換を行い、継続的に学生を支援をしていくことが大切だと考える。



ボランティア・カフェの様子

Ⅵ. その他

1. 課内研修会

開催日時	2020.8.26(水) 10:00～15:30
開催場所	オンライン開催　Zoom 使用
参加者	総長室社会連携教育課スタッフ全員
内容	2020 年度は、新型コロナウイルス感染拡大のため、業務のあり方の見直しやオンラインでの対応が求められることとなった。 そのような状況のもと、WEB 会議システム「Zoom」を利用して、 ①コロナ禍での、各業務の 2021 年度を含む秋学期以降の動き・工夫について情報共有し、意見交換を通じて、担当業務の参考とすること、 ②総長室社会連携教育課として、業務が違っても、問題意識を共有し、コミュニケーションを図ること、 を目的として、オンライン研修会を実施した。 10:00～12:00 までは、「ボランティアセンター」、「立教サービスラーニングセンター」、「社会連携」、「立教セカンドステージ大学」の各業務に分かれ、コロナ禍での課題または計画とその対応策について、画面共有機能などを活用しながら話し合い、「企画シート」をまとめあげた。 13:00～15:30 までは、各業務でまとめた「企画シート」を、ブレイクアウトセッション機能を活用しながら、各業務2グループに分かれ、他の業務担当者が加わり、3回の意見交換会を開催し、他の業務担当者と情報共有を行った。また、意見交換会で得られた助言・気づきを、最後に、各業務で持ち寄り、情報共有し、オンライン研修会は終了した。 総長室社会連携教育課は、「ボランティアセンター」、「立教サービスラーニングセンター」、「社会連携」、「立教セカンドステージ大学」の4つの担当に分かれ、また、池袋キャンパス・新座キャンパスを含め、4箇所の事務室に分かれて業務を行っているが、今回、WEB 会議システム「Zoom」の機能を修得しつつ、オンラインにおいて一堂に会し、相互にコミュニケーションを図りながら、新型コロナ対応など、実際の業務に即した研修が行えたので、参加者の満足度も高かった。

2. 外部研修・協議会等への参加

開催日時	2020.10.19（月） 15:00～17:00
開催場所	東京6大学ボランティアセンター連絡協議会 オンライン開催　Zoom 使用
参加者	総長室社会連携教育課課長　佐藤　一宏 総長室社会連携教育課　阪下　利哉 総長室社会連携教育課　松村　郷士
内容	参加大学は、早稲田大学、明治大学、中央大学、法政大学、立教大学の5校。2020年度は、法政大学が幹事校となり、オンライン開催となった。 各校のボランティアセンター担当者による情報共有・意見交換を目的とする研修会となる。 2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大下における、各校のボランティアセンターの活動報告や直面する課題に対する意見交換が主な内容となった。 対面でのボランティア活動が困難な状況であるなか、各校ともオンラインボランティアの企画やオンラインイベントの実施、モノづくりボランティアなど、工夫に富んだ活動を行っていた。 また、課外活動が制限されるなか、組織の維持も困難となりつつある学生ボランティア団体の状況など、各校とも同じ課題を抱えていた。課外活動への制限の内容については、それぞれ違いがあり、新型コロナ感染症予防の難しさが現れた結果となっていた。 今回、得られた情報は、ボランティアセンターのみならず、社会連携教育課内でも共有が図られ、次年度も含め、今後の活動の参考とすることができた。 2021年度は、立教大学が幹事校となる予定である。

Ⅶ. ボランティアセンター研修会

平野ボランティアセンター長講演会

「立教大学におけるボランティア活動を考える」

日　程：2020 年 12 月 14 日(月)
場　所：立教大学新座キャンパス7号館2階会議室
講　師：平野 方紹（立教大学ボランティアセンター長・立教大学コミュニティ福祉学部教授）
参加者：立教大学ボランティアセンター
　　中川 英樹(副センター長、立教大学チャプレン)
　【ボランティアセンタースタッフ】
　　佐藤 一宏、阪下 利哉、松村 郷士、茅　芙美、広瀬 かおり、小幡 彩子、増田 由紀

大学で何を学ぶのか

平野 方紹センター長

私が立教大学に赴任したのは 2012 年のことです。

翌年の 2013 年からボランティアセンターで業務を始めましたので、それから、8年間、活動してきました。当時の学部長からお声がけいただいたときには、お手伝いをするぐらいの軽い気持ちでいたのですが、そこから深みにはまって今日に至りました。個人的には、佐藤課長はじめスタッフに恵まれたことが何よりの幸せでした。私が何もしなくても、スタッフが仕事を回してくれる。そのおかげでここまで来られたと感謝しております。

これから4つお話をします。まず、「大学で何を学ぶのか」です。今年はコロナ禍で、4月から大学らしい学びができなかったのが正直なところですが、実はそのおかげで、「大学とは何なのか」を改めて考える機会になったと思っています。一般的には、大学は勉強して知識を身につけるところです。それだけの場所であるなら、我々教員は、教えるべきことを効率よく効果的に伝えるための授業技術を向上させればいいだけの話です。それはオンラインであっても同じです。でも、ほとんどの学生から、当たり前の学生生活が送れていないという不満の声が寄せられました。それは、友達と話したり、色々な活動をしたりすることができないのはおかしいというわけです。授業料の問題は別にして、ただ覚えるだけの勉強だけすればいいのなら、こんな文句は出ないはずです。

問題は、「当たり前の大学生活ができない」ことでした。

一体この大学生活とは何なのでしょうか。私は、大学の学びは講義やゼミに限るのではなく、仲間との交流や課外授業も含めた、その全てから得られるものだと考える必要があると思います。学生たちにとって今の状況は、一方的に受け取るだけで自分から考えを発信したり共有したりすることができず、受身の学びになってしまっている。だから強い不安や不満を覚えています。

確かに社会的な器という意味では、大学は学問研究をする場所です。マクロ的な視点から見ればそうですが、ミクロ的な視点、つまり学生一人ひとりから見てどうなのかを考えていかないと、やはり学生たちは息が詰まってしまいます。

そこで、このミクロ的視点で考えてみることにします。学生の多くは、大学をライフステージの1つと考えています。大多数の学部生は、10 代から 20 代前半に入ってきます。では、高校までと大学の違いは何なのかといえば、自分と社会との関係が問われる点にあります。小学校から中学校でも大きな変化がありますし、中学生が高校生になるのも大変です。でも、そこで「きみはどんな人間で、将来何を仕事にしたいの」と聞か

れることはあまりありません。大学で何を勉強するのか、何を志ざすのかは、将来どうするのかに直接つながってゆきます。私は、立教の中でもコミュニティ福祉学部福祉学科という専門がかなり絞られたところにいます。もちろん福祉学科の全員が福祉に進むわけではありませんが、学生たちは、ある程度、将来何を目指すかを考えて入ってきています。教員養成系大学や医学部や看護学部を志す学生も、自分は社会で何をするかのイメージは持っています。大学院に進む場合の専攻選びも、将来のしたいことと結びついています。大学は、単に次へのステップではなく、「自分が社会でどう生きるのか」、「自分が何者か」を問われる場なのです。

今の社会は、ラベルで人を判断します。私は自己紹介で立教大学に勤めています、社会福祉を教えていますと伝えます。そうすると、社会はそれで私という人間を判断します。立教生たちにしても、立教大学の何学部何学科ですと言うと、社会はそれでわかった気になります。でも、よく考えてみれば、仮に福祉学科の3年生とすれば150人はおり、それぞれ違う人間のはずなのに、世の中は「立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科」というラベルだけでわかったような気になってしまいます。良い悪いは別として、自分がどういう人間なのかが、外からのラベル付けで決まっていく部分があります。こういう状況ですから、学生は一人ひとり、大学という場で、自分は何者で何をしようとしているのかの問いに答えを出さなければなりません。実はこれ、就活のエントリーシートの必出テーマです。裏を返せば、このことをはっきりしてこいと社会から求められていると考えられます。

立教大学とボランティア活動

では、社会と自分が問われる大学でボランティア活動に携わるというのは、学生にとってどんな意味があるのでしょうか。また、そこでボランティアセンターが果たす役割とは何なのでしょうか。

それを考える前に、まず立教大学でのボランティア活動の始まりを振り返ってみましょう。歴史を紐解きますと、一番古い記録は、1923年の関東大震災時にまでさかのぼります。東京が被災地となり、チャペルを中心として学生たちが救済活動を行ったというのが、大学の公式記録の中で残っている最初の学生ボランティア活動です。実際には、それ以前にもチャペルを中心に、文京区付近にあったいわゆるスラム街で、同じ聖公会グループの滝乃川学園と一緒に奉仕活動を行っていたという断片的な記録があるなど、もっと古くから活動はありました。大学生のボランティア活動ということに着目すると、同時期に東京大学などで、いわゆるセツルメント活動（宗教家や学生などによる社会の下層に属する人々への社会事業の1つ）が始まっていました。大学セツルメントという形で、問題意識を持った学生たちが集まって地域で活動していました。これは学生自らが始めて自主的に活動するもので、大学はあまり関与していませんでした。それと比べると、立教では、チャペルが中心ですが、大学が関わっていくという明らかな違いがありました。これは立教の独自のあり方で、大学として全学的に取り組んでいくスタイルを昔から持っていたというのが、立教のボランティア活動の系譜で重要な点です。

これは触れておかなければならないことですが、立教大学には残念な歴史があります。

第二次大戦中、軍国主義に呑まれて一時キリスト教精神を放棄してしまったことがありました。戦時中には、池袋のチャペルが徴用されて漬物置き場にさせられました。第二次世界大戦が終わって、立教大学も復興に向かうのですが、その復興においては、戦争で投げ打ってしまった建学の精神を取り戻すことから始まりました。その動きの一環として、ボランティア活動や奉仕活動がきちんと位置づけられました。キリスト教精神を取り戻すだけでなく、チャペルの復興と合わせて、具体的な実践活動として取り組むものとして進められたのが、立教のボランティア活動の特徴です。

時を同じくして、昭和30年代に学生が自主的活動としてボランティア活動を始めていました。そして、これも立教ならではの特徴ですが、現在の学生部が主導してさまざまな活動を展開していくなかでもボランティア活動が広がっていきました。チャペル、学生、学生部の3つの動きが母体となって、まずはチャペルがボランティアセンター的な役割を果たしながら、学生部も正課外教育プログラムとしてもさまざまな社会活動が実践されていきます。

ここで大学全体のボランティア活動をまとめるものが求められ、この3つを束ねるものとして、2003年に立教大学ボランティアセンターが創設されることになりました。立教大学ボランティアセンターは20年ほど前に突然できたものではありません。我々の活動は、1世紀以上にわたってチャペルが築き育んできたボランティア活動、学生の自主的活動と、大学が全学的に取り組んできた正課外教育活動の3つを継承してます。

実際、ボランティアセンターの活動には、この3つの要素が今でも息づいています。立教大学ボランティアセンター自体の歴史は20年弱ですが、100年以上の歴史を背景にしていると思っています。

ボランティアセンターの機能と役割

そんな立教大学のボランティアセンターの活動の具体的な特徴は何なのでしょうか。立教大学は 2014 年に、ボランティア活動を推進し、さまざまな発信をしていることが功績として認められて、厚生労働大臣表彰を受けました。ボランティアセンターとして受賞しているのは、関東地区では3校だけで、全国でも4校ほどしかありません。対外的に見ればすごいことなんですけれども、立教のカラー、学生もそうですが、自分たちの成果をアピールすることが苦手です。

受賞した他大学、例えば、早稲田大学では、ボランティアは大学の社会活動という位置づけで、教育スタッフが中心になってリードしています。また、淑徳短大は、長谷川良信という大正時代に仏教系のセツルメントで活躍した有名な人が創始者で、その流れをくんだ大学の理念があり、ボランティア活動は理念の実践として、やはり教員のリードで行われています。

立教も大学がリードする部分は持っていますが、この2校とはちょっと違うところがあります。それは、ボランティアセンターには、ただ学生たちをまとめて引っ張っていくスタイルには収まらないということです。

それは何かと言うと、私は3点挙げられると思うんです。1つは、「寄り添い型支援」です。

これの最たるものが「一貫連携教育・立教学院清里環境ボランティアキャンプ」です。私が初めて清里環境ボランティアキャンプに参加した 2013 年は、まだトップダウン方式でした。企画や運営は教職員が全部決めて学生リーダーに伝え、学生たちが実行して、小学生、中学生、高校生を引っ張っていく形でした。3日間のキャンプでは毎晩、翌日に何をするかの打ち合わせが行われますが、そこに学生は入っていませんでした。学生は色々な作業をするのですけれども、教職員に指示と判断を仰いで従事することが主な役割でした。

それが、2014 年に変化が生じます。学生たちの方から、夜の打ち合わせに自分たちも参加したい、具体的に何をするかも自分たちも一緒に決めていきたいという希望があり、以降は教職員と学生で運営を決めるスタイルに変りました。今はさらに進んで、教職員は学生リーダーたちのサポートが主で、学生が主体性を発揮するキャンプへと進化を遂げています。もちろん、これは歴史的な積み重ねがあってのことで、過去が悪かったということではありません。学生たちを「駒」として使うのではなくて、自分で考えて判断できる環境を整える「寄り添い型」のアシストに変わってきていることの一つの現われです。

もう1つは、「協働型支援」です。ボランティア活動に取り組んでいる大学のほとんどは、個々のサークルを応援する個別支援型の支援がメインです。立教の場合は、佐藤課長の功績だと思いますが、「ボランティアサミット」を開催して、様々なボランティアサークルがそれぞれ自分のところだけで考えるのではなく、みんなでどうすればいいのかを考える協働型のボランティア活動ができるように支援しています。

全体で共有することで、視野が広がるという大きな意味があります。さらに、「ボランティアオリエンテーション」があげられます。今年はできませんでしたが、新入生歓迎時に各サークルの勧誘ですが、基本は新入生を取り合うというか、何とかして自分のサークルに入ってもらうおうと勧誘をするわけです。ところが、ボランティアに関しては共同でオリエンテーションを行い、1つの窓口で受け入れを行っています。これは大変画期

的なことです。考えてみれば、もともとボランティアとは協働して行うものです。そのコアの部分をとても大事にしてきた活動は、ここでも活きてきています。

そして3つ目が、「提案型支援」です。ボランティアセンターと学生の関わり方で、よく見られるのが「対応型アシスト」です。学生から、「こういう活動をしたいんだけどどこかいい場所ないでしょうか」と相談されれば、適切なところを紹介する。これが一般的な大学ボランティアセンターの基本的スタイルです。もちろんこれはこれで重要な機能ですが、立教では、加えて、提案型のアシストを実施しています。それが「ボラカフェ」です。学生から助言を求められたときに、こうしなさいと即答するのではなくて、幾つかの選択肢を提示して、最後はあくまでも学生に決めてもらいます。これは我々が行うどのイベントにも貫かれている基本姿勢です。こうあるべきだとか、こうしなければならないと縛るのではなく、学生の可能性を広げる発信をしていく、この提案型支援が持つ意味は、大きいと思います。

そもそも、ボランティアを考えるときに、その前提として「ボランタリー」というものがあります。「ボランタリー」とは、自発的であること、あるいは自分たちの発想で行うことをいいます。ボランティア精神とも言えると思いますが、このボランタリーの心をもってさまざま実行している人たちがボランティアだと考えられます。となれば、ボランティアセンターとしては、ボランティア活動に導くよりも前に、ボランタリー、ボランティアの気持ちを育成する役割を担っていると思います。そのことは大学で学ぶことにもつながってくるし、自分がどう生きるのかの答えにもなっていくのではないでしょうか。

まず「ボランタリー」というのが広い精神としてあって、その中の一角にボランティア活動をする人たちがいる。逆を言えば、ボランティア活動はしないけれども、ボランタリーな気持ちを持っている人たちをつくることも大切だと思っています。学生の中には、物理的・経済的な問題や時間的な制限などで、ボランティアをしたくてもできない人がいます。しかし、誰もがボランタリーな気持ちをもつ、ボランタリーな考え方を身につけて大学生活に取り組んでいくことはできると思うんですよね。

つまり、ボランティアセンターの役割はこのボランティア活動という限られたものだけでなく、ボランタリーの部分にかかわっているのです。立教大学全体で見れば、ボランティア活動に参加している学生の比率は3%から5%ぐらいだと言われ、これでも他大学よりは高いのです。しかし、この参加者数よりも、ボランタリーな発想を持っている人がどれだけいるかが重要です。立教はミッション系の大学だからといって 100%がクリスチャンではありません。信徒ではなくても、キリスト教の精神や考え方に触れることにとても意味がありますし、歴史的に見れば、チャペルボランティアも、その活動参加者数は大人数ではありませんでした。ただ、そういう精神を持った人たちが身近に存在したからこそ、立教のボランティアは育まれていったのです。今、立教でボランティア活動に携わっている人たちは、大学全体から見ればごく一部かもしれません。それでも、そこから伝わるボランタリー、それは「立教の精神」にも通じるものであり、その立教の学生みんなが備えてほしいものを通じて、自分が何者であり、自分はどうしたいかを考えることができると思います。

少し専門的な話になりますが、社会福祉法という法律では、社会福祉の担い手を2つに分けて扱います。1つは、「社会福祉を目的とする事業」です。つまり仕事としての社会福祉、それは、職業です。もう1つは、「社会福祉に関する活動」です。仕事としてではない形の活動です。例えば、企業の社会貢献活動、ボランティア活動、地域の助け合い活動などです。学生で言えば、学生の本業は勉強であって、サークルやその他の課外に行っていることを「活動」と言います。このようにして、法律は職業としての部分と、活動としての部分に分けて社会福祉を考えています。

ただし、両者はまったく別のものではなくて、接点もあります。その具体例が「ボランティアコーディネーター」です。コーディネーターそのものは職業です。しかし、対象としているものは、「活動」です。学生からすればボランティアは本業、正課ではありませんが、ボランティアコーディネーターは「業」として携わっています。

個人的なことですが、私は大学で社会福祉を勉強して、その後 24 年間、公務員としてと社会福祉の仕事をしてきました。しょうがい者福祉、生活困窮者支援、老人福祉、ケースワーカーや行政としてかかわってきました。大学で教鞭をとる立場になってからもずっと社会福祉を教え続けています。その意味では、私はずっと社会福祉を「仕事」としてきました。その立場から言えることですが、意外なことに、福祉関係者はボランティアに対して理解はありつつものすごい反発を持っています。自分たちはボランティアではない、プロとして仕事をしているというのが福祉従事者の1つのアイデンティティです。確かに福祉はもともと慈善事業から始まり、その慈善事業はボランティアが起源ですが、福祉従事者としてはプロとして専門的な支援をしている、

そこにあるのは、隣人愛ではなく、プロだという気持ちがあります。ただ、現実には「活動」の部分があって、そこをどうバランスを取るのかというのが、実は難しい課題です。そこで鍵となるのが、プロでありながら、アマチュアの世界にかかわっていくコーディネーターという存在です。

わかりやすい例として、料理番組があります。料理を作ることは、どこの家庭でもすることです。でも、アマチュアとプロの世界ははっきり分かれています。レストランのシェフの出す料理と、家庭の料理とはまったくの別物です。では、家庭料理に関してプロはいないのかというと、確かにいます。テレビの料理番組を見ると、そこで扱うのは完全に家庭料理です。お店ではなく、家で作る料理を扱っています。でも、教えている人は、明らかに料理のプロです。三ツ星レストランのシェフが、自分はプロで、これはプロの料理だというのはわかります。でも、家庭料理でも、プロがかかわって、こうすればいいですよと教えることで、大きな違いが出てくる。だから、家庭料理で番組が成り立つのです。

ボランティアコーディネーターも本質は同じだと思います。確かに特に教えを請わなくても、みんながしていること、できることかもしれません。しかし、そこにプロの視点が入ることによって全然違ってきます。だから、私はプロとアマチュアとをすっきり分けるのではなくて、重なった部分がすごく大事だと思っています。プロには、アマチュアにかかわる仕事というものがあるんだと私は思います。誰もが取り組んでいる部分にプロであるコーディネーターがうまくかかわることによって、活動が円滑になったり、幅が広がってゆきます。それを組織として支えるのがボランティアセンターです。

そういった意味で、私は、コーディネーターは専門職だととらえていますし、ずっとそういうつもりで採用をしてきました。ここで言う専門職というのは、専門的知識と専門的技術の両方を兼ね備えている人という意味です。でも、ここで心にとめておかなければならないのは、それはあくまでも「こちら側」の発想だということです。専門的技術と専門的な知識があるからさまざまな取り組みをしていけるのは事実ですし、自分たちもそう思っています。でも、学生から見れば、専門的知識や技術を持っているかどうかはあまり関係ありません。福祉の現場でも、専門的技術や専門的知識を持っているのが専門職と事業者は言いたがりますが、住民から見れば、別に専門的知識や技術を持っているかどうかはあまり問題ではなく、自分の問題を解決してくれるかどうかが重要なのです。つまり、学生の側にとっては、一歩先を歩んでいてくれることが安心の源なのです。先の経験から導き出し、だからこうしたほうがいいよと事柄に即した的確なアドバイスをくれる。自分が困って歩み出せないときにそっと背中を押してくれる。失敗したときには、どうフォローすればよいかを示してくれる。こうしたことを学生は求めています。視覚しょうがい者のガイドでは、視覚しょうがい者にとって、見える人間が自分の前を歩いていることが前提条件なんです。その後を歩いていけば自分は安全なわけです。盲人にとって一番怖いのは、自分が先頭に立たされることです。自分の前はどうなっているかわからないわけですから、そこを歩けと言われても、落とし穴があるかもしれないし、段差があるかもしれないのです。先に誰か歩いて、その後をついていけば、安心できる。これと同じです。

2番目は視野です。換言すれば気づきの問題です。これも学生たちには福祉の授業で教えていますが、身長100センチの小学1年生と140センチの中学生で何が違うのかと言えば、一番決定的な違いは、目線と説明します。100センチから見える視野と140センチから見える視野は全く違います。目の前に車がとまっていれば、100センチの小学校1年生からは、車の向こう側は見えません。しかし、140センチの中学生には見えます。視野の広さによって見えるものが違うように、色々なことに気づけるか、気づけないか、そこを広げるのはコーディネーターの役割だと思います。学生にすべてに気がつけ、全部考えろというのは無理な話ですから、何か見落としや抜けがあったときに、教えてあげられるのがコーディネーターの大きな役割です。

3番目は、それぞれの違いを取り持つことです。ボランティアを受け入れる側と活動する側の違いや色々な思いの違いがあります。この違いを当事者たちで解決しろというのは難しいです。けんかをその当事者で解決しろといっても無理な話です。第三者が入ってうまく調整することで解決できることが少なくありません。それだけ、この違いを取り持つという役割はすごく大事です。当事者同士では、たいていの場合、どちらかが我慢しなければなりません。こうした関係は長続きしません。でも、まずちゃんと違いを認めながら、双方が負担や苦痛を感じないように調整する。これこそがコーディネーターが発揮する専門性の最たるものだと思っています。そして、今ボランティアセンターが担っている全学での役割の1つがまさにこれです。

私は拠点としてのボランティアセンターについて強調したいと思います。私が赴任する前は、ボランティア

センターは池袋キャンパスの4号館から学生関係施設ウィリアムズホールに行く鈴懸の径にはみ出す形で建っていました。それもプレハブのような建物で、学生たちからも何をしているのかほとんど認知できていなかったと思います。人間が色々な制度にアクセスするとき、実は存在が入口になります。学生がいきなりボランティア活動を一人で始めることはありません。場所だとか人だとか、そういったものを介在して活動につながります。相談できる人や窓口があったり、ボランティアサークルで先輩から引っ張られてとか、必ず何か存在がないとアクセスしにくいのです。そう考えると、ボランティアセンターは大事な拠点です。あそこに行けば相談できる、何かわかるだろうという受け皿なんですね。ボランティア活動へ自分で探してきて自分でつながれる人はいいです。ただ、圧倒的多数のそうではない学生たちにとってみれば、どういう形でかかわればいいのか皆目見当がつかないことがほとんどです。そのときに拠点があるかないかの違いは大きいです。

その意味で、2013年に池袋キャンパスの5号館にボランティアセンターができたのは画期的なことでした。少なくとも学生には、大学としてボランティア活動に取り組んでいること、そこに行けば知りたい情報が得られることが視覚的に実感できます。さらに、中に人がいて、ボランティアに関する何かをしているんだなと伝わることの意味はとても大きく、存在感を示すことが、ボランタリーの普及にもつながるのだと思っています。

大学のボランティアセンターの役割と機能とは、突き詰めると、「若さ」をどう考えるかにつながってきます。若いというのは、可能性と可塑性があることだと言ってもいいでしょう。いろんな可能性を持っていて、それに合わせて自分をつくっていけること、それこそが若さですし、もう1つ、色々なことで失敗したとしても、それを成長の糧にできる柔軟性を持っていることも若さです。これらはすべて支援があって成り立つことではないでしょうか。やり直しがきく、違う方法を試せる。だから、勇気を出して一歩踏み出すことができるのです。おそらくボランティアセンターは立教のなかでその役割を担ってきた場の1つだと思います。立教全体から見れば、ボランティアセンターは一部局に過ぎませんが、立教のなかにボランタリーという発想をつくっている、学生が自分を見つける手助けをする。その一部を担っていることは間違いありません。

ボランティア活動への期待

これはボランティア論の講義で話したことです。フランスにロマン・ロランという作家がいました。ベートーヴェンの生涯をベースにした『魅せられたる魂』や『ジャン・クリストフ』など、20世紀を代表するフランスの文豪です。彼は若者向けに書いた本にこんな一節を残しています。

「およそ歴史や社会を動かすものは思索と行動が結びついたものでなければならない。行動しなければならない、とゲーテは言った。思索しなければならない、とレーニンは言っている。」

確かに歴史や社会を動かす者は、やみくもに行動していては駄目で、深い理念や思索が必要です。でも、それだけでも駄目で、やはり行動が結びつかないと意味がないわけです。この一節では、「行動しなければならない」と言っているのはゲーテで、「思索しなければならない」と言っているのがレーニンです。ゲーテもレーニンも歴史や社会を動かした人ですが、小説家のゲーテが「行動しなければならない」と言い、革命家のレーニンが「思索しなければならない」と言っています。ここに意味があります。ボランティア活動も同じではないでしょうか。大学で学ぶことは大事ですし、深く考えることも重要です。でも、その2つが結びつかなければ、社会を動かすことはできません。もちろん革命を起こせとは考えていませんが、日々の行いの中で、あるいは、日々の実践の中でできるほんのわずかなことを淡々と実行してゆく。先程お話ししましたが、同じ料理でも、少しの工夫で全然違ってきますし、そこで家族が、家でこんな味ができるんだと驚く。このささやかな喜び、幸せが、世の中を少しずつよくする鍵になってくると思います。

今、「三密」を避けるために何がつらいのかと言ったら、こんな小さな喜びや、ちょっとしたことができなくなっていることではないでしょうか。近づかないように、触れ合わないようにということで、今まで当たり前だったことができなくなっている。当たり前に一緒に食べたり、話したり、あえて考えもせずに過ごしていた日常が、実はとても幸せなことだったんだと痛感しています。ボランティアの世界は、そんなに大きく世の中を変えることをめざしている訳ではありません。施設に行って、1日中おむつをたたんでいました、半日、空き缶を拾っていましたとかいうこともよくあります。この行為を取り出して見たら、社会を変えられるわけでもないし、自分の未来が切り拓けるわけでもないかもしれませんが、一歩踏み出したこと自体が大きな意味を持っていますし、何かをするときに試行錯誤と工夫を重ねることが成長につながっていくのだと思います。

立教大学のボランティアセンターは、立教ならではのカラーを持っていることが最大の強みですし、ボランタリーであることを発信している拠点としての自負を持っています。私は歴代のセンター長としては長く勤めさせてもらいましたが、立教大学の歴史から見れば、150年の歴史の中のたったの8年です。ボランティアセンターの仕事は、この150年の蓄積に支えられています。そう考えれば、これから先の未来につなげていくため

にも、とまることなく歩み続けていただくことを願っています。立教で学んだ人たちが、来てよかった、この4年間、あるいは大学院を含めて6年間で自分なりのものを見つけられたという手応えをつかんで巣立っていってほしいと願っています。それは大学が自らの意義を確認できることでもあります。

駆け足となりましたが、8年間を振り返って気づいたことをお話いたしました。ご清聴ありがとうございました。

○**佐藤**：平野先生、ありがとうございました。本当に平野先生らしいお話だったと思います。日頃私たちは、先生がおっしゃるように、「ボランティア」とは何なんだろうかということを考え、問い続けながら仕事をしています。しかしともすると、それが凝縮されて、狭くなったり硬くなったりしてしまうことがありますが、今日、平野先生がもう一度「ボランティア」という意味合いを、立教大学とのつながりも含めて解きほぐして説明していただきました。そして、その中に詰まっているものが何なのか、立教大学のボランティアセンターとは、ボランティアコーディネーターとは何なのかという意味合いやそこに学ぶ学生がどういう存在なのかということにもに触れながらお話していただいたことは、私たちにとって、とても大きな学びのひとときであったと感じています。

実は、今年度ボランティアセンターのメンバー全員が一堂に会したというのは、今日が初めてです。月1回オンラインのボランティアセンター会議はありましたが、平野先生と対面で大事な話を共有できたということは、本当に良かったと思っております。

残りの時間、参加した一人ひとりのメンバーと平野先生とで質疑応答の時間をとれればと思っております。どうぞよろしくお願いします。

○**中川**：平野先生、ありがとうございました。モヤモヤしていることがすっきりしたと思います。色々思うのですけれども、一番私が、もう一回しっかりと自分の中で改めて考えたいなと思ったのは、ボランティアセンターと言っても、色々あると思うことです。地域社会の中にもあるし、その中で、大学のボランティアセンターの位置づけというのか、大学のボランティアセンターが持っている意味というものを改めて自分の中で考えたいなと思います。あと、立教大学は学生部のパンフレットに書いてあったりするのですけれど、「自分探し」ではなくて「自分づくり」だというように表現してあって、4年間という1つの年限を、自分を探すのではなくて、つまりどこかに正解があるものを探すのではなくて、今ここで自分を耕してつくっていくということが、1つの大学の使命として、特に立教大学が大切にしているものとされています。自分をつくっていくということにも、他者と関わりながらボランティアをしていくということと非常に関係しているということを改めて思いました。

あと大学のボランティアコーディネーターの仕事は、社会と個々人の接点をつかんだり、人と人とのつながりをつくったりする意味において、非常にチャプレンの仕事と似ているなと思いました。最初に平野先生がお話くださったように、もともと関東大震災の後、ボランティア活動というものが立教大学の中で始まっていきましたけれど、多分それを主導していたのは、おそらくチャプレンが持っていた、当時のネットワークというか、人とのつながりの中に学生を、「あなたが行って来なさい」と言って、そこにどんどんつないでいったというのが最初の始まりだったのではないかなというように思います。ボランティアコーディネーターのお仕事というのは、何かここに本当に育てたい、関わりたいと思う学生が1人いて、その学生をどのように育てていくか、つくっていくかということに、ボランティアセンターが持っているリソースをつなげていく、そういう中で、それこそボラン

ティアのボランタリーな人材育成、そういうものに寄与しているところがボランティアセンターであり、ボランティアコーディネーターなのだなということを改めて思いました。

もう1つ思ったのが、戦後、大学教育で、多くの大学が大事にしていた「一般教養」とか「学生助育」というものがありますが、現在、ほとんどの大学がそういうものをやめて、専門科目などに特化していく中で、その立教大学で言うところの「全学共通科目」と「学生助育」というのは、立教大学の中でも死語になっているのかもしれないのですけれど、そういう「学生助育」というのは多分、単に支援するだけではなくて、自らが育とうとする力を組織的に支援していくというのが、立教大学が大事にしてきた「学生助育」ということであり、本当に立教のスピリットではないかと思います。色々な人がどんどん忘却していく中で、そういうマインドというかスピリットというのは、このボランティアセンターとか立教サービスラーニングセンターとか、そういうところにずっと継承されているのだなということを改めて思いました。とてもいい勉強の機会になりました。ありがとうございました。

○**平野**：本当にお話のとおりです。やはり、本当は立教大学が持っている「全学共通科目」とか、「学生助育」は、もっと重視するべきと思います。

○**松村**：非常に貴重な話を聞かせていただいて、ありがとうございました。平野先生はよく「ボランティア論」でもおっしゃっていましたけれど、ボランティアというのが、他人のためであるというイメージは世の中というか、学生一般も持っているイメージであります。しかし、やはりお話を聞いて改めて、自分のためという部分もあるというか、「自分づくり」という部分が大きいのだなと思いました。そしてその達成は、自分をつくっていく過程において、サポートが必要だというようなお話がありましたが、その部分に関わることができる、ある種の幸せというか面白さ、大学職員として経理とか財務とか人事等の部署に配属になると、1ミリもそんなことを思わない仕事をする機会が多いのですけれども、ボランティアセンターの仕事に関わっていくと、そういう4年間で非常に成長していく学生を見ることができる、そういったポジションにいることができるということの幸せというか、ありがたさというのを改めて感じました。

大学職員の立場からすると、今のような視点が仕事の中にあるということが薄れつつあるというのは事実で、大学が担わなければいけない仕事がどんどん高度・細分化しつつある中、先ほど申し上げた経理にしろ、人事にしろ、財務にしろ、そういった部署がよりある種の専門性が必要になっている以上、その反動でだんだん従来の立教が大切にしてきたことがおろそかになっていくことは非常に残念だなと思いました。

平野先生に伺ってみたいのは、大学を取り巻く環境が、もちろん阪神・淡路大震災の時代とは全然違いますし、それどころか、やはりこの10年という短い間をとってしても変わってきていると思います。そしてそれと併せて入学してくる学生の性質が変わってきている部分があるかと思います。このような状況でこのボランティアセンターの将来というか、今後のボランティアセンターにおいて今まで大切にしてきた部分にプラスアルファする部分があるとすれば何かという点でご意見があればいかがでしょうか。

○**平野**：学生が変わってきたのは事実ですね。昔の学生より、ある意味では、精神年齢的にはちょっと幼くなってきているようです。知的能力は向上しているけれど、子どもっぽくなっています。立教のカラーもあって、自分から何か行動するとか、自分から要求するのが難しくなってきていますし、先ほど中川チャプレンがおっしゃったように、できている答えを求めたがるとか、そういう傾向になってきていると思います。福祉では、「個別化」と言いますが、昔の学生は群れて何かするという傾向でしたが、最近はコンピュータゲームを1人でパラパラやるように、孤立化する傾向が強まっているようです。

それから大学自体変わって来たということがあります。とはいえ、確かに学生は変わっていますが、青年期の特徴はそんなに変わらないと思っています。世の中や時代によって学生のカラーは変わりますが、本来、青年期に何を求めるかということは、案外、共通しているものがあると思います。やはりそこを大事にしてあげることが必要だと思っています。

今の世の中全体を考えれば、効率的で効果的であることを求められます。たくさんお金を稼いで、偉くなることがよいという価値観、これは世の中の一般の価値観では、ごく普通のものです。ただ、福祉の立場からすると、その一般の価値観で、しょうがい者とか高齢者を見てしまうと福祉も社会もなくなってしまいます。立教大学の持っている1つのポリシーとして、神の前ではどんな人であっても全て平等であるということがあります。だから、世の中一般の価値観とは違う思いがある。キリスト教精神に基づく教育を行う立教大学だからこれが言えるのだと思います。これはやはり立教大学のカラーとして持っていていいと思います。ボランティアに携わる者として、私たちはアンチテーゼとして出してもいいと個人的には思っています。

○**阪下**：平野先生、お話ありがとうございました。私も6年ほど会社員を経験して、それから転職してきて立教大学で職員になり、もう 15 年強くらいになるのですけれども、純粋な学生支援部局というのは今回が初めてで、日々業務を行うにあたって色々な気づきをさせていただいております。本当にありがとうございます。今日も特にお話をいただいた中で立教大学の特徴として、ボランティアセンターは「寄り添い型支援」をしていくという話がありました。学生自身が考え、行動できるように支援するということで、これは本当にやる意義があることだと思っています。私は特に会社にいたので、教育というのはサービスであると、何かしてあげることが大事であると考えていた節がありましたが、やはり先輩職員の方から、「ちょっとそれはやりすぎじゃない」ということを結構言われたりしていて、そういったことがどういうことなのか、なかなかわかっていなかったのですけれども、今日お話をいただいて、なるほどと思いました。学生自身が考えて行動でき、そして成長していく、そういう過程を含めて教育なんだなということがとても大切なことなんだと、また気づかせていただきました。本当にありがとうございました。

平野先生に聞きたいなと思っていたのは、8年間やってこられた中で、一番ご記憶に残っているご経験はどんなことなのかということです。

○**平野**：色々ありました。2013年に赴任したときのボランティアセンターは、組織というよりも職人集団でした。それぞれが自分の仕事を持っている職人で、ボランティアコーディネーターもそれぞれ自分のテリトリーを持っており、何か組織で1つ仕事をしているというのではなくて、それぞれが自分のテリトリーを持っている職人が集まっているという感じで、ボランティアセンターって何だろう。そのような第一印象でした。

そのような意味でこの8年間の中で、ボランティアセンターがセンターらしくなってきました。みんなで1つの目標に向かって仕事を分担しながらやっていくスタイルや風土ができてきたことを実感しています。今、佐藤課長を中心にして、組織として、色々な運営ができるようになったことが非常に大きいことでした。

○**小幡**：平野先生、ありがとうございました。色々お話していただいた中で、ボランティアセンターの支援の特徴が印象に残りました。「寄り添い型支援」や「協働型支援」、「提案的支援」ということですが、今年はコロナ禍でこれらの支援をより学生から求められたように感じました。本当に大事な支援だということを実感できた年でした。コロナ禍で、活動が一切できないサークルも多く、「もうサークルをたたんでしまおうか」という相談を幾つか受けました。そのような時に、ボランティアコーディネーターを中心に他サークルとのコラボの提案や、学生と学生とがつながれるような対応をしました。ボランティアセンターを頼ってくれたのも、学生たちがすぐにつながれたのも、昔から「寄り添い型支援」や「協働型支援」をしており、すでに土台ができていたからなのだと思いました。

「提案的支援」に関しても、学生一人ひとりの悩みに耳を傾けながら、今の学生たちに必要な支援というものを皆で話し合いながら考えていきました。色々な提案をしていく中で、私は立教大学のボランティアセンターしか知らないので、これが普通だと思っていたのですが、大学によって特色も対応も違うのだなとお話を聞いて知りました。このように皆で話し合いながら学生一人ひとりに提案ができるのも、昔から立教大学が「提案的支援」をしてきたからこそなのだと思いました。改めてお話を聞くことができて本当に良かったと思います。この立教大学の特色を生かしながら今後も仕事をしていきたいと強く感じました。ありがとうございました。

○**広瀬**：本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。立教大学の多くの歴史の中で今があるということを改めて詳しくお伺いすることができて、本当にこちらで働くことができて良かったと感じました。特に印象に残ったのは、「ボランティアコーディネーターというものは、プロでありながらアマチュアに携わっている専門職である。」というお話で、素敵な仕事だと思いました。4月に着任して、出勤して3日で在宅勤務になったこともあり、どう動いたら良いのか、立教大学の標準がどういったものなのかということを簡単に聞くことができない環境で業務を行っていました。アイディアを出し合わなければならない時にも、立教大学に相応しいのか？と判断することが難しく、自身のあり方や関わり方を模索していました。みなさんが当たり前のように進められている業務の内容を理解するために、1日中、過去の様々な資料を調べる毎日でした。

慣れないことばかりですが、ボランティアセンターで活躍できるように頑張ろうと改めて決意しました。ありがとうございます。

○**茅**：本日はありがとうございました。ボランティアコーディネーターの話が始まり、「専門職としてのボランティアィコーディネーター」というお話になって、正直どうしようと、大変焦ってしまいました。私自身もいまだに「ボランティアコーディネーターって何だろう」と常に考えながら仕事をしています。

それは、平野先生が料理研究家の話を、例えで出されていたのですけれども、この仕事を私が始めたときに、何をしていいかわからない、つまりレシピがなかったと思います。レシピがなくて、いきなり、「それでは学生支援をやってください」というように言われて、正直非常に戸惑いました。

前職は教員でしたが、仕事として学生や児童と関わるというスタイルは同じです。しかし、小学校ですと、指導要領というものがあって、自分で授業を事前に組み立てる準備をして子どもたちに関わって…というスタイルでした。

大学のボランティアセンターでの仕事というのは、会う学生会う学生が「初めまして」から始まって、そこから全くのゼロベースで学生と関わり、そこから一緒にやり方を見つけていかなければなりません。本当に 100 人学生がいたら 100 通りのやり方があり、それが不安で、前任者の関口さんの背中を見ながら、こういう風に柔軟に対応を変えていかなければいけなのだなと、学びました。

だんだん慣れてきたときに、コロナになり状況が一変し、学生を現場につなぐということができなくなりました。そこでまた、ボランティアコーディネーターは、この状況下で何をするべきなのだろうかと、私の中でもすごく迷いや葛藤がありました。

つなげることができないのだったら、私たちのいる意味がない。しかし、「学生支援」というのは絶対にこの状況でも必要であるはずと思い返して、ボランティアセンターの4人、それに、サービスラーニングセンターの教育研究コーディネーターの福原さんや大森さんとも何度も何度もオンライン会議をしながら、ようやく「学生支援」の形を見つけていったという感じでした。

正解がないし、これからもレシピもマニュアルもないものであるというように思います。今回お話を聞いて改めてそれをしみじみ感じて、今年とまた来年とも状況は違うし、「清里環境ボランティアキャンプ」や「高畠の農業体験」、ほかの行事もできるかどうかわからないという中で、私たちが柔軟に関わり方を変えていくしかない。ウィズ・コロナの時代に、こうした柔軟さも非常に大事になってくるのではないかと思いました。素晴らしいお話を本当にありがとうございました。

〇**増田**：9月下旬から立教大学ボランティアセンターで働くようになって、学生としっかりと触れ合うということがなく、オンライン中心の活動になっていたのですが、今回、平野先生の話を聞かせていただいて、立教大学ボランティアセンターには、どのような歴史があるのかということを改めて理解しました。何となくわかってはいたつもりではいたのですが、お話を聞くことで、立教大学ボランティアセンターが、特に学生に対しての役割を大きく果たしているということを理解できました。今は主にオンラインでの関わりですが実際にコロナが落ち着いて、対面でいつもの日常が戻ってきたら、その活動もぜひ見てみたいなというように改めて思いました。

〇**佐藤**：今日は本当にありがとうございました。先生のお話をお聴きして、2つの大事な点を認識しました。1つは、私もずいぶん歳を取ってきたので、色々な人に、「立教らしさが残る、最後というか、大事なところで働くことができていいよね」と最近よく言われます。その意味合いは何なのかということを自分なりに考えていたのですが、平野先生のお話の中で、立教大学ボランティアセンターの中に、チャペルが創立以来ずっとつないできた建学の理念、それから、学生部がずっと大切にしてきた大事な考え方（学生助育）、そしてボランティアセンターが学生やボランティア先などの関係者とともに培ってきたもの、そういった思いがボランティアセンターにはたくさん込められているというところが、まさに他の人から見て、立教らしい、本当に良い場所だねというように思われているところなのかなと感じました。そのような視点からも今一度、立教大学ボランティアセンターの持つ意味や大切さを認識させていただきました。

それからもう1つ、皆さんとのやりとりの中で本当に大事だなと思ったものは、中川チャプレンもおっしゃっていましたが、今、大学の中で「学生助育」であるとか「SPS」という言葉は、もう死語だと言われ、振り向かれなくなってしまっています。しかし、それは全くナンセンスなことで、いくら時間は経過しても、大事な理念や考え方はずっと生き続けるものであるし、継承していかなければならないと思っています。

まさにその「学生助育」というのは、学生を助けて育てるのではなくて、学生が育つのを支援するという意味なのです。だから、平野先生や中川チャプレンがおっしゃった、学生が自分をつくっていく、まさにその支援をしていくということだと思うのですが、そのことが今、本当に大学教育の中で問い返されないといけないと思っています。せめて立教大学ボランティアセンターはそういったことを決して忘れずにこだわりながら、学生に伝え続けていくことが大事だと再確認しました。

それがやはり立教らしさというものを我々がこだわり続けていくことにつながるのかなということを、平野先生のお話を聞きながら考えておりました。

本当にありがとうございました。

ー座談会ー　新しいボランティアの形を考える

実施日：2020 年 12 月 14 日(月)
会　場：立教大学新座キャンパス7号館2階会議室
参加者：平野 方紹(立教大学ボランティアセンター長・立教大学コミュニティ福祉学部教授)
中川 英樹(副センター長・立教大学チャプレン)
藤橋 唯(立教大学法学部政治学科1年次)
平岡 立成(立教大学観光学部観光学科3年次)
小沼 和矢(卒業生、埼玉県三芳町社会福祉協議会職員)
進行役：茅 芙美(立教大学ボランティアセンターコーディネーター)

■コロナ禍の1年を振り返って

茅：「激動の…」と言ってよい1年になりました。人と関わるのが最たる活動であるボランティアにとっては改めて存在の意義を考える年でもありました。今日はウィズ・コロナ、そしてポスト・コロナ時代のボランティアセンターのあり方をみなさんとともに考えていきたいと思っています。まずは、今年の取り組みなどに触れていただきながら、自己紹介をお願いします。

茅　芙美コーディネーター

藤橋：法学部政治学科1年の藤橋唯です。出身は群馬県で、9月に体育会のボート部に入りました。今は埼玉県戸田市で寮生活をしながら部活動に励んでいます。なぜこのコロナ禍でボート部というハードな部活に入ったのかというと、きっかけは、SNS で日々練習に全力で打ち込む先輩たちの姿を見て憧れたことでした。強豪で、本気で日本一を目指している熱さがありながら、アットホームで温かい雰囲気があるところにも魅かれました。入部して今3カ月になりますが入ってよかったと心から思います。

将来の夢は、地域コミュニティの再生を通じて誰もが安心できるような社会をつくることです。今はボランティアセンター主催の「ボラカフェ」にアプローチしたり、先輩から話を聞いたり、ほかには近所の子ども食堂に、

藤橋　唯さん

平岡 立成さん

小沼 和矢さん

まだアポを取っている段階ですが、動き出しています。あとはとにかく情報を集めて、今できることを始めています。この夢は簡単ではないと思いますが、今日出会った皆さんや、これから出会う方々と協力して実現していきたいです。

平岡：観光学部観光学科3年の平岡立成です。観光とマーケティングの中でも、特に地域振興に観光をどう役立てればいいのかとか、地域ブランドのつくり方といったことをゼミや授業で勉強しています。まちおこしや地域創生に非常に興味があって、そこは今、参加しているサークルの被災地での復興支援活動とも結びついているところがあると思っています。

そのサークルですが、僕は東日本大震災復興支援サークル「Three-S」の代表を務めています。具体的な活動としては、夏休みや春休み、冬休みなどの長期間の休みを利用して東北の三陸沿岸の地域に赴き、そこに生活している方々とお話をしたり、クリスマス会を開いたりしています。逆にその体験や成果を持ち帰って、学園祭で写真展を実施したり、東北の名物のずんだ餅を販売したりして、震災の記憶を風化させない取り組みもしています。防災意識を高めることも1つの目標です。今年度はコロナ禍なので現地にはまだ行くことができておらず、オンラインで現地の方と話をするのが精一杯の状況です。

小沼：立教大学コミュニティ福祉学部の平野ゼミ OB の小沼和矢と申します。今は地元の三芳町社会福祉協議会の職員をしています。メインの担当がボランティアセンターということで、立教大学のボランティアセンターにはよくお邪魔しているんですが、ほかにも福祉教育、車椅子大会だとか、母子・父子世帯の子どもの支援全般だとか、地域住民向けの講座の開設や、しょうがい分野にも関わっています。最初はボランティアセンター専任で入る予定だったんですけど、気づいたら多方面を手がけていました。

今、特に力を入れている仕事が1つあります。コロナ禍において、ほかの社協や地域でのイベントがどんどん中止になっていく中、うちの社協では、基本的に中止はしないようにするのがモットーです。代替案としてオンラインだとか、人の接触を少なくして実施する方法を考えて行っています。私は学習支援教室を担当していますが、Zoom や LINE を使って子どもたちと勉強したり、福祉教育や車椅子体験は、本来だったら先生が行ってお話をするんですが、映像データをお渡しして観てもらうようにしたり。今の環境でできることを考えて取り組んでいます。

もう1つ力を入れているのが、高齢者へのオンラインサポートです。高齢者にとってスマホとかタブレット、パソコンを使いこなすのは難しいことですが、社協でかかわっているボランティアさんがタブレット教室を始めたので、うちもタブレットを7台そろえました。地域でオンラインを活用できる高齢者の方を少しずつでも増やしたいと思っています。

平野：ボランティアセンター長の平野です。

今年は想定外の年で、退職間際になってこんなにコンピューターを覚えなきゃいけないのかと困りました。ほとんどがオンライン授業になってしまって、画面を相手にしゃべるのは疲れますね。学生は大変だろうと思います。ゼミ合宿も一切できないまま最後を迎えることになり、非常に寂しい年になってしまいました。

所属するコミュニティ福祉学部福祉学科では、社会福祉実習があります。福祉現場で実習するのですが、予定していた受入先が軒並み受け入れ不可になってしまいました。本来は 180 時間の実習ですが、どうしても 90 時間しかできないなど、この4月、5月は手配に追われました。実習はあきらめた大学もありましたが、立教では、とにかく現場に行ってほしいと、何とか実施しました。とにかく大変な状況に追い込まれて、みんなで協力してここまで来た年でした。

中川：2016 年からボランティアセンターの副センター長をしております。立教大学には 2014 年4月からチャプレンとして奉職しています。チャプレンの仕事は、簡単に言うと、「人と人とをつなぐ」ことです。僕たちは「人間」という字のように「間」を持って生きているんだと思うんですね。皆さんもそうですよね。親と自分の「間」、友だちと自分の「間」というように、「間」をいつも抱えながら生きている。そこには、喜びもあるし、絶望したり、傷ついたり傷つけられたりもあります。そんなふうにいろいろな「間」の中を行ったり来たりしながら、人と人とをつないでいくのが僕たちの仕事だと思って働いています。

私はもともとキリスト教の牧師なのですが、大学のチャプレンとして働くことになるとは考えてもいませんでした。立教という場所で学生一人ひとりと関わりながら、その学生たちが社会とどのような接点をつくっていくのかを考えています。自分の課題、課題の場所を持つというのはすごく大事なことだと思っているんですね。平岡さんが震災の後の東北と関わり続けているように、自分が物事を考えたり、発想したり、戻っていくことができる場所を人生の中で持っておく必要があると思っています。社会の中に自分の課題を持ち続けられる場所を、どうやって学生さんたちの中につくっていくか。また、チャプレンとして、学生一人ひとりと関わりながら、適切な場所につなげていくことを大事にして働いています。

■大学で「ボランティアをする」ということ

茅：今年がこんな1年になるとは、誰も予想していなかったと思います。新型コロナウイルスの感染拡大で、立教大学も4月からオンライン授業になりました。生活全般にわたって制限がかかり、大学に通うことができないということで、不自由で不安な日々を送っている学生も多いはずです。

どうしてもネガティブなことがまず思い浮かんでしまうかもしれませんが、それだけではなくて、こんな気づきがあったとか、発見をしたとか、そういう体験を共有する場にしていきましょう。ボランティアというのは、やはり自分に余裕がないとなかなか踏み出せないと思いますが、学生のお2人が、ボランティアに関わろうと思ったきっかけは何だったのでしょうか。

藤橋：私は何度か転校をしたのですが、新しいコミュニティに一人で入って居場所を見つけることの難しさや、困難にもたくさん直面しました。ふと視野を広げてみたときに、地域には独り暮らしのお年寄りとか、共働き世帯の子どもとか、寂しい思いをしていたり、居場所が感じられないような人たちがさまざまいることに気づいたんですね。自分と同じような思いをする人を1人でも減らしたいと思い、そこから、自然と自分でアクションを起こしてボランティアをしてみようと考えるに至りました。不安よりも何かができる期待のほうが大きかったのですが、本格的にボランティアをしたことがなかったので、どのようにして情報を集めていいかがわからなかったんですね。そこでボランティアセンター主催の「ボラカフェ」で職員の方や先輩方に色々なつながりをいただいて、入っていくことができました。

平岡：私はあまり躊躇はなくて、嫌だったらやめればいいくらいの軽めの気持ちで最初の一歩を踏み出したんです。周りの人たちがとてもいい人だったり、一緒に話したり何かするのが楽しかったり、居心地のよさで今もとどまっています。何か特別なきっかけは正直思い当たらないですね。

中川：藤橋さんは、地域コミュニティの再生を目指したいとのことですが、どんな社会をイメージしていますか。

藤橋：私自身はインプットの段階で、まだフィールドでの学びができていないので、言い切れるものはないんですけれども、イメージとしては、地域の中で孤立している人がいたときには気づき合える社会でしょうか。今は近所付き合いが希薄化していて、住民同士のつながり自体なくなりつつあるように思います。そういう状況の中で見逃されている人の存在をなくすこと。昔は近所の人、地域の人同士が気づき合って、支え合っていた部分が崩れてしまった中で、自分で選んで参加していくコミュニティのみならず、そこに住んでいることで支えてくれる人がいる。将来的には行政からアプローチしていくことができたらと今は考えているところです。

中川：特に都市部なんかは家が階層化して、もともと「横」だった人とのつながりが「縦」になってしまった。それによって支え合いの文化が崩壊したと言われるんだけど、小沼さんのいる三芳町はどうでしょうか。まだそういう支え合いの文化は残っていますか。

小沼：三芳町ぐらいの規模の町だと、「あの人最近見ない」とか、「洗濯物が昨日から干しっ放しだよね」とか

いう連絡はしょっちゅう入ってきます。地域住民の全然知らない人から「何区の何とかさんがずっといないみたいだから見てきてほしい」と頼まれて見に行くことも月に何回かあります。独り暮らしの高齢者宅をどれぐらい把握できているかわかりませんが、地域ごとに「福祉新聞」というのをつくって配っているんですね。それ以外にも、独り暮らしの高齢者が社会から隔離されないような取り組みがいろいろされています。

練馬区の社会福祉協議会に実習で行ったときに、人口の多い都市部でつながりを持ち続けることの難しさを感じました。極端なことを言うと、隣に住んでいる人の顔もわからない人が多いですよね。そういう中で仕事をしていてすごく感じるのは、個人のよりよい生活と地域づくりを考えたときに、結構ぶつかるものがあるんです。人と接したくない人っているじゃないですか。三芳町でも、自治会から若い世代が抜けていっちゃうんです。だから今、どちらを優先すればいいのかという壁に当たっています。わかりやすいのは「ひきこもり」です。とりわけ「8050問題」と言われる問題ですね。80 歳を超える高齢者の親と一緒に暮らして引きこもっている 50 代ぐらいの人たちって、人と関わりたくないけれども、このままでは親が亡くなったときに孤立するという危機感は持っているんですね。こういう人を支援するときに悩むんです。三芳町のように人口規模の小さな町でも、人とのつながりって何が正解なんだろうと思っているところなので、規模が大きくなればなるだけ、問題も複雑になっていくのだろうと感じています。

平野：小沼さんはいわゆる普通の大学生活、当たり前にキャンパスに通って、サークル活動もして卒業した。一方で平岡さんは、2年間は普通の大学生活を送って、今年1年こういう生活になってしまった。藤橋さんは、一般的な大学生活がないまま入学後1年を終えようとしています。同じ大学の学生・卒業生でありながら、3人はそれぞれ違う状況にいるわけです。それぞれの立教での「学び」、「得たもの」、「期待するもの」とはどんなものでしょうか。

小沼：私は高校生のときから福祉の専門職に就きたいと思っていました。立教に入って、最初は、将来は福祉事務所で働こうと思っていたのですが、実習先で割り振りをされたのが社会福祉協議会で、あまりよくわからないけど行ってみました。それがきっかけでボランティア活動に携わるようになり、結果として社会福祉協議会で仕事をすることになりました。立教大学に入り、平野先生のゼミに入らなかったら今の自分はなかったと思っています。学びが人生に直結する充実を感じています。

サークルやゼミでは代表を務めましたが、100 人で合宿旅行に行く手はずを整えたり、まとめたりして、リーダーシップを実践で学べたのも今に生きています。例えば県内の市町村社協職員が集まる研修が毎年あるんですけど、グループに分かれて代表、発表者を決めてくださいとふられたときに、すっと手が挙げられるんです。それも立教大学でいろいろなことと関わっていたおかげだと思っています。

藤橋：大学が始まったときは、オンラインも十分使いこなせず、家に一日中いる生活とどう向き合っていいかがわからない手探りの状態でした。でも、インプット中心になるかと思っていたら、全くそんなことはなくて、こんなにいろいろなことがオンラインでできるのかという驚きをまず感じた年になりました。家にいて時間が十分にある分、Zoom を通じてボランティアセンター主催の「ボラカフェ」に出席し、国際交流のイベントや語学系とかビジネス系のセミナーに参加してみたり、遠くに住んでいるおじいちゃん、おばあちゃんと話をしたり。自由になる時間が増えた分、むしろ色々なことができました。

オンライン活動で一番大きかったのが、「グローバル・リーダーシップ・プログラム」です。コロナ禍は人とのつながりを絶ちました。でも、そのことでかえってつながりの大切さを感じた人が多かったと思うんです。プログラムを通じて、今までそれがどれだけ不十分だったか、居場所を求めている人がこんなに多かったんだということに気づくことができた半年でもありました。グローバル・リーダーシップ活動というのは、クライアント企業からの課題と学生の理想と提案をうまくマッチさせて施策をつくっていく活動です。その中で出てきた理想が、安心できる場所でした。私は立教大学に入学して、不安感を抱えている人が多いことを知り、誰もが安心感を得て支え合うことのできる第二のふるさとづくりを提案していました。

大学生活に期待していたことは、キャンパスでしかつくれないつながりでした。1つは、気の合う仲間はもちろんですが、一方で、ゼミやプログラム活動、部活動で刺激し合い、高め合える仲間をつくりたい、そういう学生同士のつながりを求めていました。

もう1つは社会とのつながりです。豊島区には、日本のボランティアの中心的存在の団体や NPO がたくさんありますよね。私は高校生のときから地域コミュニティに強い関心を持っていたので、そういうところに実際に出ていって学んでいきたい、そういうところとつながっていきたいと思っていました。

平岡：我々の活動も、現地に行かなければ始まらないところがあります。特に被災地のような場所で、つながれる場所の持つ意味は非常に大きいと思いました。部員たちの間でもつながりを求める気持ちはどんどん強くなってきている状況なので、安心できる場所が欲しいという点はとても共感できます。

茅：例えば SNS はどんな使い方をしていますか。他愛もないことをちょっと LINE で友達に伝えてみようとか、そんなことはありますか。

平岡：僕はないですね。気軽な話をするためだけに SNS で連絡をとるのがあまり好きではないんです。返信しなきゃという気持ちになるということが、面倒くさいとも思っちゃうんですよ。さっきのつながりの話にも関わってくると思うんですけれども、そこも多分、個人個人で温度差があるのではないでしょうか。積極的に SNS でつながりたいと思う人もいれば、連絡が来なければ特に何もしないスタンスの人も当然いると思います。ただ、対面で出会うと、嫌が応でも話さなければいけないとか、席が隣だったら何か話そうとか、そういうきっかけにはなるので、そういう場が失われるのは残念ですね。

藤橋：慣れないせいもあるかもしれませんが、オンラインだと薄さを感じてしまうんです。SNS を通じてできたつながりもあります。1つは、みんな1年生で友達がいない状態なので、インスタグラムにつけるハッシュタグでつながって、オンライン上のコミュニティをつくってみたんですが、どんな人か全くわからないと不安感があるんです。ずっと SNS と Zoom でやり取りしていますが、本音で会話しづらいとか、雑談の難しさも感じます。授業ではあまりないですが、グローバル・リーダーシップの活動で、ご飯を食べながら会議しようとなったときに、対面だとごく自然にできても、誰がしゃべり始めていいかとかいうところにもすごく気を遣います。雑談って自然にしているように見えて、信頼関係の構築に関わっていたんだなと感じます。課題解決の議論の質、チームワークの質、成果物の質も、コミュニケーションで築き上げた信頼関係でできているものだとわかって、今それがしにくいというのは弊害ですね。

平野：秋学期に1年生を担当しました。基本はオンライン授業で、2回ほど大学で対面で授業をしました。そのとき1年生が「オンライン講義はやっぱりバーチャルだ。画面でつながってはいるけれども、要するにゲームの世界と同じで架空のように感じる。初めて実際に顔を合わせてみたら、やっぱりリアルのほうが、反応がわかるし、顔が見えて、ちゃんと生身の人間なんだって実感できるからいい」と言っていました。なるほどと思いました。

そうは言っても、今の状況はまだ続くかもしれません。どのようにして実感できるような関係をつくっていくかがポスト・コロナに向けての鍵になると思いました。

茅：実感ができる関係性や雑談力の大切さは、私たちも仕事をしていて感じるところがあります。例えば、同じ「聞く」でも、Zoom 会議で話を聞くのと、雑談しているのを横から耳を傾けるのとでは全然違います。人と人との関係づくりにおいて、他愛もない話というのは、エッセンスというか、ちょっとした「香辛料」みたいな感じで、深みを与えてくれるのではないでしょうか。他人に関心を持つきっかけになりますよね。もっと知りたいなと思わせるものがあります。

平野：林業体験で行く陸前高田でもそうです。おじいちゃん、おばあちゃんと話していると、脱線話がほとんどです。でも、それが重要です。要件だけのやり取りだったら、関係を築いていけません。他愛のない話は、一見無駄なようでいて、実はつながりを生む源泉と言えます。

小沼：社協でも同じです。三芳町では傾聴活動というのをしています。独り暮らしの高齢者の家をボランティアさんが月に1回以上訪問して、話をする。ところが、それも2月からできなくなってしまいました。心配で、私は時々利用者さんに電話をかけて生活の状況などを聞くんですが、そうするともうとまらなくなっちゃって、30分とか平気で話し続けるんですよ。仕事があるからそろそろ切りたいなと思うときもあるんですけど、やはり聞いてあげるということがすごく大事かなというか。雑談、他愛もない話がないと逆に駄目なんだなというのは改めて強く感じているところです。

■「ボランティアの形」はどう変わるのか

茅：3人のお話に共通しているのが、「人のつながり」とか「地域」ということですが、コロナ禍を経て、これから人々の意識が変わってくると思います。小沼さんは現場、最前線にいて、これからどういう仕掛けづくりをしていったらいいかなど、今お考えになっていることはありますか。

小沼：コロナ禍は、悪いことばかりでもなくて、こんな方法もあるんだとか、従来の発想では出てこないものを見つけることもできました。そういうところを伸ばしていきたいですね。例えば、高齢者向けのスマホ、タブレット講習。このままだとまずいと思ってみずから行動を起こす高齢者の方はいいのですが、危機感を覚えていても何もしない、できない高齢の方も結構いるんです。YouTube や Zoom って、ガラケーではできないですよね。だからこのタイミングでガラケーからスマホに変えたというボランティアさんたちもいっぱいいます。そのようにみずから進歩していくというか、対応していくんですけど、別にいいやと思っている人たちにどう仕掛けていったらいいかなというのが目下の最大の課題で、会議で毎週のように話題になるのですが、具体的な解決策が見えていないのが現状です。

　人間って、本当に何かまずいと思ったときは、動くと思うんですね。ひきこもっていた人でも、何かあればちょっと出てみようという気持ちになるでしょう。そのタイミングでうまく支援が入るというようにつなげていくことが大事だと思っています。ずっと学校に行っていなかった子をたまたま外で見かけたので、話をしたら、子ども食堂に来てくれるようになったんです。何回行っても会えないおうちでしたが、辛抱強くずっと関わり続けるというのもいいのかなと思ってます。

茅：「続ける」ということでは、平岡さんはこの1年、大変でしたね。被災地に行けない今の状態から、一歩を踏み出しつつあるところで、今、復興支援についてどのように考えていますか。

平岡：現地に移住された方や高齢者の方など、色々な人に「3・11」を聞いてみるというプロジェクトを考えています。今後、震災を忘れていく人も増えていき、下の世代に至っては、震災より後に生まれた子たちがどんどん増えてくる中で、多分みんな、いつまで続ければいいのかと内心では感じてはいて、結局、行き着く先は、「復興って何だろう」というところだと僕は思っています。それは人によって感じ方も違うだろうし、何をもって復興とするのかという話でもある。もっと言えば、「支援って何だろう」という話にもつながっていくと思っています。結局、がれきの撤去とか、肉体的な支援はもうほぼ行っていない状況で、今はひたすら話を聞いたり、子どもたちと遊んだり、町のお祭りに参加したりといった活動をしていますが、それは本当に「支援」なのとか、ひょっとして自己満足じゃないのかという議論も出てきていて、10 年の節目に、この先どうするか悩んでいます。そもそも「支援」という言葉自体にも疑問を感じてしまうんです。結局、する側とされる側というように対等ではない感じになってしまうので、私としてはあまり「支援」という言葉は使いたくないところであるのですが、かといって、じゃあ何と言えばいいかも悩ましいところではあります。

平野：プロとして福祉の仕事をしている時は「支援」の意識でいいと思います。でも、ボランティアの世界というのは必ずしも、してあげる人、してもらう人という関係ではありません。私たちも経験がありますが、被災地に行って話を聞いて、逆にこっちが励まされることはいっぱいあり、ボランティア活動の面白さとは、多分そこだ

と思います。プロの仕事では、援助者と援助される側という関係は絶対に逆転しない。これは医療もそうで、医者と患者の関係は逆転しない。

ボランティアは、お年寄りと話すなかで安らぎを覚えたり、幼い子どもたちが和ませてくれたり、しょうがいを持つ人たちに励まされたり、その相互関係、相互作用で成り立っていると思います。そこがボランティアとプロフェッショナルの仕事の違いです。

現場でよく聞く話ですが、効率的に仕事をテキパキ進めるホームヘルパーさんより、多少仕事は遅くとも「無駄口をたたく」ホームヘルパーさんのほうが、好感度が高いと言います。ヘルパーの仕事は時間単位で報酬が決められているので、所定の時間に決められたことをきっちりできるヘルパーが優秀であり有能なのです。でも、利用者によれば、そんな仕事では自分が「もの」に思えるんだそうです。一連の手順に従って処理されているように感じてしまうという声を耳にします。でも、仕事ならおそらくそれが正解です。無駄話は、相手を「人」として見ているから出てくるものだと思うのです。そう考えると、ボランティアで一番大きいのは対等の意識を持つことじゃないでしょうか。

中川 英樹副センター長

中川：私が牧師になって駆け出しのころに、病院の実習でケアユニットに関わることがありました。1人の患者さんに対して必ずチームがつくられるんですけど、そこには医師と看護師のほかに、チャプレンとか、日々お掃除をするスタッフの人が入るんですよね。なぜなら、そういう人たちは情報を持っているんです。患者さんが何に悩んで、苦しんでいるのかを身近で聞いて一番よく知っている。そう聞かされてなるほどなと思いました。

私たちチャプレンの仕事の中で大きな割合を占めるのが、学生たちに話をすることなんです。実は、その元になっているのが学生たちとの雑談なんですよ。だから、このコロナ禍は、学生と関わる機会をほとんど持てず、語るべきメッセージをなかなか見つけられないという苦悩の時期でもあります。

キリスト教の世界では、最初、教会は「Church for Others」、他者のための教会という標語を掲げていましたが、いや、「ため」というのは随分偉そうじゃないかということで、「Church with Others」に変わっていくんです。でも、「ともに」というのも何かしっくりこないと、新しい言葉を模索しているところです。医療でも、キュアからケア、ケアからシェアと言われているように、対象ではなくて、分かち合う関係性が大事なんだというのが、今、改めて問われていると思います。私は「お互いさま」という言葉が好きなんです。困っている人がいたら自然に手を差し伸べ、自分が困ったときはためらうことなく誰かに助けてと言える。そういう関係はすごく大事だと思いますね。

藤橋：「お互いさま」とか、「分かち合うこと」。ボランティアはそういう相互作用に基づいているんだという認識を、私たち、ボランティアに少しでも関わっている学生から発信していくことができたらと思います。

平野：今、発信するということを言われました、これは今、とても大事なことです。ポスト・コロナの活動はまさにこれです。今の状況は、みんながみんな助けてほしいと思っていますよ。誰しも多かれ少なかれ、精神的にも肉体的にも苦しいし、何とかしてほしいと思っている。でも、助けてと言えない雰囲気がありませんか。突き詰めていくと、コロナに感染させられる「被害者」、周りの人は感染させる「加害者」といった意識があって、できるだけ関わらないほうがいい、ふれないでおこうという社会構造になってしまった。

しょうがいを持っている人がこう言っています。今までは外に出ると、「切符を買ってください」とか、「目が見えないので代わりに読んでください」とか気軽に言えたのに、今はとても頼みづらくなってしまったと。下手に接触したら感染させられるんじゃないかという空気を感じるそうです。本当は助けてと言いたい、でも言えない。だからこそ、発信することが大事だと思うのです。助けてと声を出してもいい、逆に、手伝いましょうと声をかけてもいい。そうしないと、社会はばらばらになっていってしまいます。

私は、やはりボランティアの現場では、お互いに発信し合うことが重要だと思っています。一番厳しいのは、困っている人が SOS を出せないことです。それを避けるためにも、私たちにも発信し続けるということがこれから求められます。気にしている人がいるよということが相手に伝わる意味は大きいです。無視しているわけじゃないよ、ちゃんと考えているよというね。

平岡：私も、そういう思いが現地に届けばいいなと思って活動をしています。

平野：リアルでのボランティア活動が難しい今の状況で、オンラインの活用は意味のあることだと思います。オンラインには、時間と場所を超えられるという利点もあります。例えば、陸前高田と新座と池袋で、その場にいながら同じ時間を共有できるわけです。この強みは活かしたいです。ただ、やっぱりオンラインだけでは実感を伴わず、バーチャルになってしまう面があるので、そのバーチャルを超える工夫が必要になってくるだろうと思います。例えば、一言手書きのメッセージを送るとか、それだけでも実感が生まれるのではないでしょうか。バーチャルでありリアルでもある。コロナの時代のボランティア活動の新しい可能性がそこにある気がしています。

平岡：確かに生身の人間が見えることは大事ですね。うちのサークルで以前、女川の方とお話をしたことがあって、お礼のメッセージや感想を先方に送ろうという話になりました。迷った末に、結局 Google フォームで文章を集めて送ってしまったんです。多少、集める手間がかかっても、メンバーから直に手紙を集めて送ったほうが、向こうとしてもうれしかったかもしれないなと思いました。次回から考えます。

藤橋：今のお話を聞いて思い出したことがあります。国際交流のイベントで、私はミャンマーの女の子と友達になったのですけど、後日お手紙が届いたんですね。頑張って日本語の文字を書いてくれているのを見たときに、とても温かい気持ちになりました。少しの手間を足すことで、温かいつながりができていくんですよね。

■ポスト・コロナ時代のボランティアセンターのあり方

茅：学生支援の場としてボランティアセンターは何ができるのか。昨年までと同じというわけにはいきませんが、学生により近い場所で、一生懸命耳を傾けながら模索していきたいと思います。

平岡：学生から見ると、大学の組織ってどうしても固いイメージがあるので、少し柔らかいというか、接しやすい雰囲気があるといいなと思います。ボランティアセンターも、腹を割って話せる感じの存在になれば、学生の意識もどんどん変わってきたり、興味を引き出せたりするのではないでしょうか。

小沼：学生のときにボランティアセンターを利用したことは全くなかったのですが、今日は発信というキーワードが出ました。まず学生にボラセンの存在を知ってもらうところから始まるのだと思いました。あるのは知っていても、それだけの学生も多いと思うのです。逆にコロナ禍の今だからこそ、ネットを使って今まで届かなかった層にたどり着くこともできるでしょう。新しいことに挑戦していくといいのではないかと思いました。それは自分の仕事も同じで、今できることを見つけてしていきたいと改めて思いました。今日この場に参加して、立教が母校でよかったとつくづく感じました。

中川：立教大学は、大学を学生が「自分づくり」をする場と位置づけているんですよね。その中にあるボランティアセンターとしても、やはり一人ひとりがなりたい自分になれるような支援をする。それは人との出会いだったり、経験だったり、引き出しをいっぱい持っていて、それぞれの学生に合わせてオーダーメイドしていく。ボランティアセンターはそんなふうに機能していけたらいいですね。

平野：阪神淡路大震災のあと、ある牧師さんが東京から支援に行くときに、ろうそくを用意したんですね。周りはみんな猛反対しました。水がいい、食料でしょう、いや、お金だといろいろな声が上がったんですが、その方はろうそくを持って行かれたんです。現地はまだ停電していて、そこでろうそくを灯したら、これが現地の人たちにとってものすごく励ましになったんですよ。暗い中でろうそくが灯ると、ほっとするっていうんです。ろうそくの光は弱いけれど、熱があるでしょう。暖かさと明るさを感じて、ご飯を食べられなかった人が食べられるようになったそうです。

　この話を聞いて、私たちのボランティアセンターはこんなふうでいいんだと思いました。世の中が明るく輝いているときには、ろうそくの光なんてほとんど役に立たないけれども、世の中が暗くなれば暗くなるほど、小さな光が意味を持ってくるんです。今はコロナ禍で社会全体が大変な状況にあり、だからこそ、小さい光が必要になるんじゃないでしょうか。こういう苦しいときだからこそ、私たちは光を灯し続けなければならない。「あ

なたのことを考えていますよ、SOS を受けとめますよ」というね。
　それが立教大学のアイデンティティであり、ボランティアセンターのあるべき姿なのだと思います。そうして、つながりをつくっていきましょう。これまでと同じ方法が使えないなら、一緒に考えていけばいいんです。一人の知恵は限られているけれど、色々な人が知恵を出し合うことで超えられるものがあると私は信じています。

茅：皆様、今日は貴重な経験を共有してくださり、ありがとうございました。
本日の話合ったことやいただいたご意見は今後のボランティアセンターの活動に活かしてまいります。

Ⅷ. ボランティアセンターの概要

立教大学のボランティア活動は、「ボランティア」という言葉が社会に定着するはるか以前から行われており、キリスト教の精神にもとづく立教大学の教育理念を具現化するものとして、学内のさまざまな部署が学生支援のプログラムとして展開してきた。そうした精神を受け継ぎ当センターは、キリスト教の精神にもとづくヒューマン・ムーブメントの一環として、立教学院全体を網羅するネットワークの拠点として 2003 年 6 月に誕生して以来、立教らしいボランティアセンターの活動を追求している。

2016 年度から、立教サービスラーニング(RSL)センターを設立したが、その運営は立教ラーニングスタイルの意義に照らして、単に正課科目の運営に留まることなく、ボランティアセンターと相互連携を通じて、社会における体験的な学び(社会連携教育)を正課・正課外の両面から総長室社会連携教育課として一体的に推進できるよう積極的に関与していくこととする。

Ⅰ. 基本方針

1. キリスト教の精神にもとづくヒューマン・ムーブメントの一環であることを活動の精神的な支柱として据える。大学をはじめ立教学院全体の運動として推進を計る。

2. ポール・ラッシュをはじめとした立教学院関係者のこれまでのボランティア活動の成果と精神に学びながら、その継承と新しい視点からの発展を模索する。

3. 学内、学院内、地域での活動グループ、外部団体などとのネットワーク構築を図り、相互協力のもとでの活動の展開を進める。

4. 活動の中心的な担い手として学生の活動、企画提言、発想などを尊重する。

5. 活動者が自己を点検しつつ日常を顧み、かつ明日への意欲を生み出せる場、未経験者が気軽に立ち寄り相談や助言を受けることのできる場、そのような場である「ホーム」となることをめざす。

Ⅱ. 目標

1. 学生の関心、問題意識の喚起
はじめからボランティアに関心のある学生の数はそう多いものでもなく、それだからこそ、本学入学後にどのようなプログラムに出会い、ボランティアの意識にめざめるか、に焦点をあてて活動したい。日常われわれを取り巻く環境への意識、大学構内で出会う人への興味など、ほんの些細なことへの注意が見落としがちなものを見つめ直すきかっけとなること、行動すること、気づいたことを伝えていくことが、よりよい社会にしていく力になることを伝えていく。

2. 各種ボランティア講座、講演会、プログラムの充実
ボランティアって本当のところどういうものなの、というたくさんの「？」に応えるための講座を充実させている。国際化推進の動きに伴い、「海外ボランティア講座」で相談会と報告会を開催し、学生が安心して海外でボランティアができる支援を行っている。特に、日本財団学生ボランティアセンターと協定書を締結したことにより、彼らのリソースを活用しながら、より一層の充実をはかりたい。また、実際にさまざまな活動をしている学生から直接話を聞く会(ボランティア・カフェなど)にも取り組み、学生による学生のためのボランティア活動支援を始めている。将来的には、学生の人財データバンク化をめざしていきたい。「誰でも楽しいを目指したバリアフリー映画上映会」は、学生がいろいろな力を出し合い、本当にバリアをなくすことがどういうことか考えながら創り上げ、一般社会に広める活動となっている。

3. 近隣(福祉関係)学校等との日常的プログラムの開拓
筑波大学附属桐が丘特別支援学校や同視覚特別支援学校などと協働してのいくつかの試みは、学生や教職員にとっても身近にしょうがい者とふれることのできる貴重な機会となっている。池袋では、NPO 法人ゼファー池袋まちづくりや NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワークなどのプログラムに積極的に協力し関係性を密にしていく過程を通して、新規プログラムを開拓していくこととする。また、豊島区で学習支援や子どもの居場所づくり等の活動を行う団体のネットワーク(とこネット)の月に一度

の定例会で、豊島区民社会福祉協議会をはじめ、約 20 団体と情報共有を行い、地域全体で子どもへの支援活動を行うことができるよう、キャンパスの拠点となる豊島区とのつながりを大切にしている。
新座では、学生サークル「Bambino」が新座キャンパス近隣の東野小学校の学童に通い、子どもたちと交流をしたり、パントマイムサークルの「どりいむ・ぼっくす」が新座市のお祭り等のイベントに参加して地域との関わりを継続している。また、先述の東野小学校のボランティア会議にコーディネーターが定期的に参加し、情報交換を行い地域コミュニティとの連携を深めている。

4. 学生活動支援
学生主体のボランティア活動やプログラム作成の協働、ボランティア・カフェなどを継続的に開催することにより、学生やボランティア学生団体をつなげることを進める。さらには、両キャンパスのボランティア学生団体の協力・連携を深めるためにボランティアサミットやプレサミットの開催にも注力する。

5. 国内キャンプの主催、プログラム開発
立教学院一貫連携教育としての「清里環境ボランティアキャンプ」や「農業体験 in 山形県高畠町」をはじめとして、新たなフィールド開拓にも意欲をもって取り組みたい。

6. 総長室社会連携教育課としての協力・連携の推進
ボランティアセンター、立教サービスラーニングセンターさらには復興支援・陸前高田サテライト、社会地域連携、セカンドステージ大学事務室も含めた事務組織である総長室社会連携教育課による一体的な推進体制を構築する。

7. コロナ禍におけるボランティア支援のあり方の模索と挑戦
コロナ感染の拡大により、ボランティアセンター主催行事である「清里環境ボランティアキャンプ」や「農業体験 in 山形県高畠町」のプログラムが中止となった。通常のボランティア活動も停止となったため、ボランティアをしたいと考える学生はもとより、学生ボランティア団体も日常の活動や合宿ができず、活動の存続に苦慮している状態である。
ボランティアセンターとしては、新入生を中心としたオンラインボラカフェを実施したり、学生ボランティア団体の相談にのったり、オンラインボランティアサミットを開催して、ボランティアセンターが学生をつなぐ役割を積極的に果たしていく。また、バリアフリー映画上映会についても、オンライン上映会に伴い、新しいバリアフリー映画上映会のあり方を求めてチャレンジしていく。2021 年度は、コロナ禍におけるボランティア支援のあり方にさらに積極的に取り組む。

Ⅸ. ボランティアセンター運営協議会委員一覧（2020 年度）

運営委員一覧

センター長	平野　方紹	コミュニティ福祉学部教授
副センター長	中川　英樹	大学チャプレン
副センター長	未定	
大学チャプレンから1名	中川　英樹	大学チャプレン兼任
総長が指名する者1名	未定	
学生部長	安達　栄司	法学部教授
立教学院本部事務局勤務員から1名	深井　啓人	学院人事部人事課
立教大学専任教員から1名	大山　利男	経済学部准教授
立教大学専任職員から1名	伊藤　秀弥	教務部学部事務5課課長(新座)
校友会から1名	清水　恒明	立教大学校友会副会長
センター長が指名する学外有識者1名	石森　　宏	NPO 法人ゼファー池袋まちづくり相談役、本学校友
	小林　俊史	NPO 法人ゼファー池袋まちづくり理事長(陪席)

事務局	佐藤　一宏	社会連携教育課課長
	阪下　利哉	社会連携教育課
	松村　郷士	社会連携教育課
	広瀬　かおり	ボランティアコーディネーター(池袋)
	茅　　芙美	ボランティアコーディネーター(新座)
	小幡　彩子	社会連携教育課嘱託職員(池袋)
	柚口　麻希子	社会連携教育課嘱託職員(新座)※9/23～産休・育児休職
	増田　由紀	社会連携教育課派遣職員(新座)※9/23～勤務

立教大学ボランティアセンター　2020 年度活動報告書

発　行　2021 年 3 月 31 日
発行者　立教大学ボランティアセンター
池袋キャンパス
171-8501 東京都豊島区西池袋3－34－1
TEL.03-3985-4651 FAX.03-3985-4657
新座キャンパス
352-8558 埼玉県新座市北野1－2－26
TEL.048-471-6682 FAX.048-471-7312
e-mail. volunteer@rikkyo.ac.jp
web https://spirit.rikkyo.ac.jp/volunteer/SitePages/index.aspx
印　刷　東洋出版印刷株式会社